

---

Magic to cross **異なる世界と異なる魔法**

藍上男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M a g i c   t o   c r o s s   異なる世界と異なる魔法

### 【Nコード】

N 3 9 1 8 U

### 【作者名】

藍上男

### 【あらすじ】

それは、異なる世界の魔法使いと魔導師の交わる物語。この作品は、魔法先生ネギま！ と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバー作品となります。

## プロローグ

ムンドゥス・マギクス

魔法世界・廃都オステイア。

その、物理的には絶対に不可能ともいえる高度な場所には幻想的ともいえる宮殿がある。

名を、墓守り人の宮殿という。

本来はありえないほどに魔力に満ちている、その宮殿を駈ける一同の姿があつた。

彼らの名は、白き翼。かつて、魔法世界を二分した『大戦』、あるいは『大分裂戦争』とも言われる世界規模の戦争を終わらせた英雄、ナギ・スプリングフィールドの息子であるネギ・スプリングフィールドを中心とした若き英雄の集まりだ。

そして、今20年前の再現が起ころうとしていた。

宮殿で待ちかまえているのは、『完全なる世界』コスモエンテレケイア。今まさに、世界を無に返そうとする儀式の真っ直中だ。

とはいえ、敵の数はさほど多くない。召喚された、魔物の群を除けば、完全なる世界の構成員およびにその協力者はごく少数。

人数においてはむしろこちらが勝っていた。

だが、決して油断することなどできようはずがない。何せ、敵はその少人数でかつて実現不可能だった悲願を達成目前にまで迫っているのだから。

「龍宮さん……」

つい先ほど敵を足止めし、別れる事になった龍宮真名の事を思い、やや不安げな様子になりながら、ネギがつぶやくように言った。

現在は、父譲りの特徴である赤毛が雷にでもなったかのように光っている。いや、髪の毛だけではない。全身が雷になったかのように光り輝いている。

マキア・エレベア  
闇の魔法。咸卦法に並ぶ究極技法と呼ばれるソレを、ネギ自身が並外れた応用力で改良した独自の魔法、『雷天大壮』によるものだ。

「真名ならばきつと大丈夫でござるよ」

答えたのは、長瀬楓。

180センチ以上の、並の成人男性よりも高い身長を誇る大柄な少女だ。着ている服は忍者のような装束であり、彼女は実際に甲賀中忍である。なお、甲賀流において中忍は最高位にあたるため、彼女の非凡な実力が計り知れよう。

「足止めに徹すればどんな相手にもひけをとりません。私が保証します」

追従するように言ったたのは、桜咲刹那だ。

十代半ばほどのサイドテールの黒髪の、どこことなく鋭い剣を連想させる瞳の持ち主であり、大和撫子、という単語がよく似合う美しい顔立ちの少女だ。

京都神鳴流の剣士であり、その剣の腕は一流の域に達している。

その強者二人に太鼓判を押されては、ネギも大きく頷くほかない。

「分かりました。では　っ！」

そう言葉を繋ぎかけた刹那。

大きく後ろへと後退した。

轟！ と爆音が響いたかと思うと辺り一面が淡い光によって包まれた。

（新手　？）

急遽この場に現れた”それ”の光により、一瞬にして視界を奪われるも、相手もすぐ  
にこちらに攻撃を仕掛ける様子はない。

「  
」

光がはれていき、目の前の敵の姿が序々に鮮明になっていく。

「あな、たは　？」

現れたのは、白一色の統一された服装の相手だった。そのどこか機械的な印象を与える服装は、幻想的な光景であるこの宮殿にいるのにはひどく場違いな様子がする。

そして、何らかの幻術によるものか、顔の周辺がぼやけてまるで表情が見えない。年齢はおろか、男性か女性かすらも曖昧だ。

この状態で会う相手。

そんな相手は敵以外にはありえない。だが、それでも聞かずにはいられなかった。

「何者ですか？」

「魔導師」

相手は短く答える。

「魔導師？」

その言葉を思わず聞き返してしまった。

魔導師　という言葉は聞き慣れない。だが、地方によっては魔法使いの事を魔術師や呪術師などという呼び方をする場合もあると聞く。

この相手も、それと同じようなものなのかと考えていると、

瞬間。

「っ！」

巨大な魔法陣が展開された。

驚愕。

あまりにも一瞬の出来事であったため、対応が遅れた。  
いや、例え即座に対応していたとしてもちゃんと反応できたであろうか。

そう考えるほど、その魔法陣が展開されるのは迅速だった。

一瞬にしてネギの体を紫色の光が包んでしまった。

（この感覚は…… 転移魔法？）

ネギ自身は転移魔法を仕えない。

しかし、他者がマジックアイテムなどを介して使用する場面などは見ていたため、術式こそまるで分からないものの、今起きている現象が転移魔法によるものと分かった。

だが、それはすでに手遅れだった。

彼の体は完全に紫色の光に包まれてしまった。

## 第102 無人世界。

ここは、その名の通り人はいつさい住んでいない世界だった。いや、それどころか生物すら観測されていない荒野が広がるだけの、寂しい土地だ。

その世界の軌道上に、時空管理局Ⅰ級8番艦「アースラ」はいた。アースラは幾多もの次元世界を統治する時空管理局の誇る最新鋭

の次元巡航艦だ。

その内部は、地球の文明レベルを凌駕した作りとなっており、何も知らない地球人が見たらSFの世界にでもトリップしたのではないかと疑いたくなることだろう。見るからに精密そうな計算器の数々、薄く光り、宙に浮ぶモニター。次々と浮かび上がり、消えていく立体映像の数々。

「プレシア・テストロッサの研究所というのはここで間違いないのね？」

そのアースラの艦長室にいるのは、この船の艦長である、リンディ・ハラウンである。緑の髪と知性的な瞳。そして実年齢よりもはるかに若々しく見える、肌と顔立ちの持ち主だ。

「ええ、一時的にですがこの世界にある研究所で生活していた時期があるそうです」

凜々しい声でそう答えたのは、髪の毛から服まで綺麗に黒一色で統一された少年、クロノ・ハラウンである。14歳の若い執務官だ。

執務官は、事件調査や法の執行の権利が任される日本警察などで例えるのなら警部クラスの役職だ。この地位につくためには相当な知識と判断力が必要とされる。その地位にわずか12歳で就任し、今年で執務官歴3年目を迎えるクロノはそれだけ非凡な能力を有していることの証明でもあった。

「まあ、そうはいつでもかなり昔の事みたいですし、今件と関係のある証拠品が出てき

たりする可能性はほとんどないとは思いますがね」

位置情報のうつったモニターを表示したのは、エイミー・リミエツタ。クロノの部下である執務官補佐だ。年齢はクロノよりも2つほど年上であり、士官学校時代からの友人同士であり、姉弟のような関係でもある。

一見、軽そうな性格に見られることもあるが、実際には執務官補佐としての高い能力の持ち主であり、リンディやクロノからの信頼も厚いのだ。

「確かにその可能性はほとんどない。でも、皆無じゃない以上調べておいて損はないよ」

「はいはい、真面目だね、クロノ君は」

「茶化さないでくれ」

少しむっとした様子でクロノが返す。

「PT事件でフェイトさんの無罪はほぼ確定的だけど。証拠品は多いに越した事はありませんね」

茶に手をつけながらリンディが言った。

彼女の言うフェイトというのは、フェイト・テストロッサというとある事件の参考人である少女だ。

PT事件、あるいはジュエルシード事件と呼ばれる事件だ。主犯は、彼女の母親であるプレシア・テストロッサ。

事件種別は、遺失遺産の違法使用による次元災害未遂事件。

プレシアは、自身の悲願成就の為に、フェイトを実行犯にし、あるロストロギア・ジュエルシードを集めていた。

だが、フェイトの集めたジュエルシードの数ではプレシアの望みは到底叶わない。自棄になったプレシアは次元震を起こした。

リンディやクロノ、それに稀有な才能を持った民間協力者達の活躍もあり、結果としてそれは防がれた。そして、主犯であるプレシアは虚数空間へと転落した。生還不可能と判断され、プレシアは事実上の死亡扱いとなり、主犯の死を持って事件は終了した。

しかし、事件の終了と事件の解決は同意語ではない。

実行犯だったフェイトとその使い魔アルフの裁判、プレシアの犯行の裏づけ捜査。彼女達が犯行を起こした数々の現場での現場検証。やるべき事は山の用にあつた。

その一環として、26年前、プレシアが失脚する原因となったヒュードラ事件以降の足取りを追った。その際に、プレシアが10年ほど前に一時的に使っていたという研究所の情報が入って来たのだ。その研究所のある場所というのが、現在アースラのいる第102無人世界だった。

「艦長、ここみたいです」

エイミィは目的地を特定したらしく、モニターに一つの研究所を表示する。

「どうやら、ここで間違いないみたいね」

リンディも、手元の資料を確認し、目前の研究所が目的地である事を改めて確認した。

プレシアは、「時の庭園」という移動する拠点を持っていた。時の庭園は、遺跡級の年代物であり、この庭園自体がロストロギ

アといっても良かった。

とはいえ、それでも万が一の事態。まずありえないことではるが、その時の庭園が使えなくなってしまうたり、時の庭園ごと切り捨てざるをえないような状況になる可能性もゼロとは言い切れない。

その万が一の事態に備えてこの研究所は用意しておいたらしい。

「時の庭園ほどではないけど、なかなか立派そうな研究所ですねー」

エイミイが感嘆したかのような声をもらす。

確かに、とリンディも頷いた。

「でも、時の庭園のように傀儡兵の類はないよね。今のところ、危険はなさそうに見えるけど、くれぐれも油断はしないよう」

「はい」

改めてモニターを見たリンディは、クロノに指示を出す。

「それでは、クロノ執務官、早速現地に向かってくれますね？」

ハラオウンという姓からも分かると通り、クロノとリンディは実の親子である。だが、公務中はその事を意識しないよう、リンディはクロノのことを「執務官」という役職をつけて呼んでいる。

「はい、分かりました。艦長」

それに答えるクロノも母とは呼ばずに艦長とリンディの事を呼んだ。

一礼すると、転移魔法によって現地へとクロノは赴いた。

その研究所の入り口から入っていく。

元は自動ドアになっていたようだが、すでに壊れてしまっているらしい。無理矢理な形でガラス製のドアをこじ開けての侵入となった。

簡素な作りの廊下を通り、中へと突き進む。

壁には絵の一つも飾っていない。実に殺風景な廊下だ。

奥まで突き進むと、一つの部屋へと到着する。畏の類がない事を確認してから、そのドアを開けてみる。

どうやら、プレシアの私室らしい。

巨大な机と、魔導に関する本がズラリと並んだ本棚が置かれてある。

「時間逆流法」「死者の蘇生について」「生と死の概念」といったタイトルがズラリと並んでいる。

「これは……」

それを見て、クロノは何とも複雑な表情を浮かべる。

『アリシアのため、かな』

バックアップを担当しているエイミィからの声が聞こえた。

プレシアの望みはすでに故人であるアリシア・テストロッサを取り戻すことだった。

そのために、方法は思いつくだけでいくつがある。

まず1つ目は、アリシアと全く同じ存在を作り出すこと。そしてこれはすでにプレシアは実行にうつしている。その成果が、プロジエクトFであり、フェイト・テストラツサなのだろう。しかし、顔も記憶も同じであつたとしても、クローンとして作り出した時点で彼女は別の存在だつた。つまりこの方法では駄目だつたのだ。

2つ目は死人を蘇らせる事。だが、これはほとんど不可能に近い。アリシアは即死しており、少なくとも現代医療では蘇らせる事は無理だつた。

3つ目。それは時間移動。過去に遡り、過去を変える。これは前者2つよりもさらに難易度が高い。現代のいかなる技術を使つてもいかなる魔法を使つても時間移動など不可能とされていた。つまり、これも実現できない。

結論として、どんな方法でもプレシアの望みは叶わない。

だが、かつて存在したというアルハザードならば話は別だ。

失われた都。御釈迦の世界のような魔法が、技術が眠る土地。どんな奇跡でも起こせると呼ばれるアルハザードの技術。

普通の人間が聞けば何を馬鹿な、と一蹴されることは必定だ。確かに、アルハザードと呼ばれる場所があるのは事実だろう。現状の技術を凌駕した古代遺産ロストロギアという形でその証拠はある。しかし、死者の蘇生や時間移動といった奇跡があるかどうかは分からない。というより、信じている者などごく少数だろう。

だが、プレシアはその「ごく少数」の人間だつた。というより、信じざるをえなかったというのが正確だろう。

だからこそ、プレシアはその奇跡に縋ろうとし　　PT事件を起こしたのだ。

「……」

再び、クロノは室内を見渡す。

この室内にある本は、時間移動と死者の蘇生といったものが大半だ。だが、すでにその大半は埃をかぶっており、長らく手入れをしていない事がよく分かる。

「……次の部屋に行くか」

もうこの部屋にいる意味はない、と判断して部屋を出る。

部屋を出ながら、先程の部屋にあった本の数々をクロノは思い出す。

時間移動、死者の蘇生。

どちらも魔法における不可能領域。いや、不可侵領域である。

しかし、プレシアはその禁句に<sup>タブー</sup>触れざるをえなかったのだろう。

プレシアの行った行為は、間違っても肯定することはできない。

それは、クロノ・ハラウン個人としても時空管理局執務官としてもだ。

しかし、プレシアのアリシアを助けたいというその思いだけは間違いなく本物だ。そちらの方は認めざるをえない。

何とも複雑な気持ちになりながらも、クロノは次の部屋のドアを開けた。

「次はこの部屋か」

ゆつくりと、ドアを開ける。

ここは、生体ポッドがずらりと並ぶ部屋だった。その中には、青く濁った液体が入っている。

何らかの実験をしていたのだろうか？

だが、その近くにある機械からはそのデータが全て抹消されており、何の実験をしている場所だったのかは分からなかった。

これ以上ここにいない意味はない、とクロノは判断を下す。

「次の部屋に行くか」

『はいはい、じゃあ次はその部屋の隣ね』

軽快な口調でエイミィが返す。

クロノは部屋を出ると、隣の部屋へと向かう。そして、これまでと同様、部屋にドアに手をかけ、

『！　ちよつと待って！』

不意に、エイミィから切羽詰った声を出した。

「どうしたんだ？」

『その先の部屋から生体反応、誰がいるよ！』

「何！」

クロノは自身のデバイス、S2Uを握る手に力を込める。

「この先、か？」

目の前のドアに改めて手をかけ、エイミィに訊ねる。

『う、うん』

こんな場所に誰が？ という疑問が出てくる。

プレシアの手下か何かか？ とも思うが即座にその考えを打ち消した。これまでの経緯から考え、プレシアの手駒として動いていたのはフェイト・テストラツサとその使い魔であるアルフのみ。

彼女らの証言によるとリニスというプレシアの使い魔もいたようだが、そのリニスはすでに使い魔として役割を終えて消えたらしく、体に病魔が巣食い、ともに魔法を行使する事すら困難な状態だったプレシアが体に負担をかけてまで新たな使い魔を作ったとも考えにくい。

そもそもそんな存在がいるのならば、PT事件で一度も出てこなかったのはおかしい。

となると誰だ？

こんな無人世界に好んで来る者がいるとは思えない。

いるとすれば世捨て人か、それとも管理局に追われている犯罪者か、それとも何らかの事故で流れ着いてしまったのか……。

いずれにせよ、確かめないわけにはいかない。

警戒心は捨てぬまま、S2Uを片手にいつでも攻撃用の魔法を発動できるよう準備をしたままドアを開けた。

「……」

厳しい表情のまま、中を見渡す。

この部屋には他の部屋とは異なり、生体ポットの類もなければ本棚もない。かといって食堂や寝室でもないようだ。物置なのかもしれないと思ったが、何一つ置かれおらず。

「！ あそこに誰がいる！」

部屋の片隅に眠るように倒れている「彼」に気づいた。

それは、一人の赤毛の少年だった。年齢はクロノよりは明らかに年下。フェイトと同世代か少し上程度の年齢に見える。

一步、また一步と最低限の警戒心は捨てないまま少年へと近づいていく。

だが、少年の方は何の反応も示さない。

「……」

手を伸ばせば届く距離までクロノが近づいても少年は無反応のままだった。すっと抱え上げるようにクロノは少年の体を両手で持ち上げた。

『クロノ君、その子の様子は？』

エイミイからやや緊張した様子の声が聞こえる。

「意識はないみたいだけど、命に別状はない。エイミイ、すまないが一旦アースラの方にこの子と一緒に転送してくれ」

『分かったよ、すぐにそうする』

直後、クロノの足元にミッドチルダ式の魔法陣が展開される。そ

の間にも、抱えた少年の様子を見る。

見れば、いくらか体に傷がついている。立場上、戦闘経験が豊富なクロノはそれが戦闘によるものだという事がすぐに気づいた。それに。

（この体……）

両の手を通じて伝わってくる少年の体の感触。一見、華奢には見えるが筋肉の発育具合が一般のそれとはかなり違う。

かなり鍛えてある事が分かる。

もしかしたら何らかの武術でもやっているのかもしれない。

（まあ、本人から聞けばいいか）

そんな考えている最中にも、クロノの体は完全に光に包まれ、アースラへと転送された。

地球の日本時間でいえば、11月28日の出来事だった。

## 1話

白。

ただ白一色。

ネギが目を覚ましてまず目に飛び込んできたのは白い天井だった。

「ここは？」

周りには医療機器といった外見の機械が数多く置かれ、自分がベッドに寝かされている状態である事が分かってきた。

派手な物はおかれていない白い質素な部屋であり、病室といった様子だ。

「目が覚めたみたいね」

不意に声のした方向を向くと、底には緑色の髪型をした一人の女性立っていた。

「あなたは？」

「私は、リンディ・ハラウンと言います。時空管理局の提督です」

「時空、管理局？」

聞き慣れぬ単語に、ネギは思わず首を捻る。

そんなネギの様子に、リンディと名乗った女性も訝しげな表情を作り、

「あなた、もしかして時空管理局を知らない？」

「は、はい……」

リンディは暫し考え込むかのような顔をした後、時空管理局という組織についての説明をはじめた。

時空管理局（Administrative bureau）。

次元を跨ぐことによって幾多にも存在している次元世界。

それら数多くの存在する次元世界をまとめ、管理・統轄するための治安維持組織。管理世界の司法機関としての機能を持ち、法を犯す者の捕縛や文字通りの意味で世界を滅ぼしかねない危険物指定の<sup>ロストロギア</sup>古代遺産の確保を主な任務とする。

その他にも、ロストロギアとは無関係な文化遺産の管理、保護。自然災害からの救助なども担当している。

「うみ」と呼ばれ、幾多の次元世界を旅し、時と場合によっては介入する次元航空部隊と、「おか」と呼ばれ、第一世界ミッドチルダを中心とする各世界に駐留し、治安維持に努めている地上部隊。ちなみに、このアースラは前者に含まれるらしい。

以上が時空管理局という組織の概要だった。

「時空管理局……そんな存在が」

ここ1年で色々なことを知ってきたネギだが、さすがにこの話は予想のはるかに上をいったのか驚きの表情を顔に浮かべる。

一方、リンディの方はそんな反応をする人間になれているらしく落ち着いた様子だ。

「まあ、信じられないという考えるのが当然だとは思いますが事実

です」

「……」

「それで、貴方は我々がとある事件で捜査中だった研究所の中で倒れていたところを保護したのですが。それは覚えていますか？」

「い、いえ……」

ネギは首を横に振る。

その様子を見て、リンディは「ふむ……すると、何か偶発的な事故に巻き込まれた次元漂流者ってところかしら」と小さく呟く。

「次元漂流者？」

その声を耳聴くとなえたネギが聞いた。

「ええ、滅多にない事なのですが、たまにあるんです。何かの事故が何かに巻き込まれて別世界に飛ばされるようなケースが」

そう言うつからもしンディは説明を続ける。

次元漂流者の事、管理世界の事、ミッドチルダの事、そして魔導師、さらには魔法の事なども。

「……」

だが、ここでふとリンディは違和感を覚えた。  
本来ならば、もっと強く反応するべきであろう部分。「魔法」と

という言葉が出て来た際にネギはほとんど反応を示していなかった。

その事が気になったリンディは、その点を指摘してみた。

「……ところで」

「何でしょう？」

「『魔法』という単語についてはあまり驚かないのですね」

「　　っ！」

次の言葉を吐き出すまでに数秒ほど間があった。

ネギのいた世界では基本的には魔法は隠匿するもの。  
だがしかし、状況が状況だ。

情報を出し惜しみしていいような状況ではない。  
意を決すると、ネギは小さく首肯する。

「はい、魔法技術は僕たちのいた世界にもありましたので」

「……なるほど」

リンディも小さく頷いた。

頷きつつも……かすかな疑問が芽生えてもいた。

魔法技術がある世界。

にも関わらず管理世界、及びに管理局の存在を知らない……。

確かに、ありえない話ではない。

たまに誤解している者もいるが、管理局の管理世界というものは魔法技術のある世界の事を指すわけではない。

次元を渡る技術を持つ世界の事を指す。さらに言うのであれば、次元航空技術があっても管理局入りを拒んでいるケースもあるし、そのような場合は管理局としても無理強いはいしない。

付け加えておけば、いかに管理局といっても全ての次元世界を見つけているわけではなく、いまだに未発見の世界は存在している。目の前の少年がその未発見世界の内の一つに住んでいる可能性だって皆無ではないのだ。

リンディは疑問をとりあえず振り払い、新たな質問を投げかける。  
「ところで、すっかり聞くのを忘れていたのですが、貴方の名前は？」

ここでネギはじめてまだ名乗ってない事に気づいた。  
忘れていたとはいえ、かなり礼を失した行為だと思い慌てて謝罪する。

「あ、すみません。僕はネギ。ネギ・スプリングフィールドといいます」

「ネギ君ね。分かりました」

リンディは笑みを浮かべた。  
それにつられてネギも笑い返す。

「あ、あの。ハラオウン提督」

「……リンディで構いませんよ。ハラオウンという名前はこの艦に

もう1人いますのでややこしいですし」

「あ、はい。それではリンディさん」

だが、ここで最も気になる事。

そして、最大の懸念事項をネギは口にした。

「僕は……帰れるのでしょうか」

「それは貴方の出身世界によりますね。すでに時空管理局が観測している世界であれば例え管理外世界であっても行き来できますし。管理外世界出身の管理局員も在籍しています。私の古い馴染の友人にも、管理外世界のイギリスという国の出身者もいますし」

「！ 今、何と？」

リンディの言葉を遮ってネギは聞いた。

「古い馴染みに管理外世界のイギリスという国の出身者もいると……て、もしかして」

ネギの言わんとせんことを察したのか、リンディは目を見開く。

「はい、そこが僕の故郷です」

「なるほど……」

そう言いつつもリンディは険しい表情を浮かべている。

本来ならば喜ばしいことだ。

第97管理外世界ならばすでに管理局が観測済みの世界だ。管理

外世界とはいえ、一定の手続きさえすれば帰郷は難しくはない。

…… 本当にこの第97管理外世界なら、の話ではあるが。

「分かりました。それでは、詳しい事はこちらで調べてみましょう。そのために伺いたいのですが……」

リンディに改めて親戚関係の住所、それに連絡先と言ったものを聞いてきた。

その質問に答える事自体は難しくない。

イギリスでの知人、それに日本在住時の友人達の連絡先を正直に告げた。

とりあえず聞く事はこの辺りだろう、と判断したのかリンディはゆっくりと椅子から立ち上がった。

「では、とりあえず貴方に教えてもらった方達に連絡をとります。それまでは艦内は立ち入り禁止の場所以外ならば自由に行き来しても構いませのでご自由にお過ごしください」

「……ふう」

背後でドアが左右に閉まる音が聞こえる。  
ネギと名乗った少年のいる寝室から出て来たリンディは、ここで  
ゆっくりと息を吐いた。

「どうでしたか？ 彼の様子は」

それを待っていたかのように問いかけてきたのは、彼女の息子で  
もあるクロノ・ハラウン執務官だ。

「そうねえ。少なくとも嘘をついているようには見えないけど……」

これは、長年管理局員として、そして魔導師として職務に携わり、  
幾多の人間達と交わって来た経験とからしての判断だ。  
まだ全てを話してくれたわけではないだろうが、少なくとも彼が  
言っている事に嘘があったようには思えない。

しかし、だ。

彼が真実を言っているとするのならば。

「ですが……彼が言っている事が正しいのならば」

リンディの言わんとしたことを先読みしたクロノが難しい顔を浮  
かべる。

「管理外世界の97番にも魔法技術がある……て事になるわね」

ふうむ……と考え込むようにリンディは顎に手を当てた。

第97管理外世界といえ、つい半年前に自身が関わった事件の

中心舞台となった場所だ。当然の事ながら、最低限の調査はしている。

それなりの文明レベルはあるものの、魔法技術がある様子など微塵もなかった。

また、その事件の現地協力者として活躍してくれた砲撃魔導師の少女からもそのような話はまるで聞いていない。

「でも、あの子に高い魔力量があるのは事実みたいです。これ、計測の結果です」

その二人の会話にやや暢気そうな声が挟まれた。

エイミィ・リミエッタだ。

彼女の手からミッド語で書かれた書類を手渡される。

「ううん。確かに凄いわねえ。なのはさんほどではないけど相当の魔力量よ。少なくとも、平均的な魔導師の量を凌駕しているわ」

「だってさ、クロノ君よりも上かもね」

エイミィは茶化すような口調でクロノに笑いかける。

「む……魔力量が魔導師の全てじゃない。その運用技術や優れた演算能力といったものがだな」

「まーあまあ。そうムキにならなくたっていいのに」

「ムキになってなんかいない」

普段は冷静なクロノではあるが、この副官兼姉貴分の前では多少調子が狂うらしく、やや顔を赤くしていた。

どこか微笑ましい光景だ。

その光景を見ながらも、リンディは頭を鋭く回転させ今ある情報を整理する。

だが、残念ながら今ある情報だけでは答えは出せない、との結論に達した。

「まあ、とりあえず彼の言った住所に連絡をとるところから始めましょう」

リンディは顔に笑みを浮かべると、早速作業にうつり始めた。

「うーん……」

ネギは、アースラ内部を歩いていた。特に目的地などはないのだが、とにかく部屋にじっとしている気にはなれなかったのだ。

暗鬱な表情はなかなか晴れない。

それも無理はない。大事な決戦を前にしたところで、このような

世界に急にとばされてしまったのだから。

ここに来る直前の戦いで”彼女”が使った幻術の類ではないかと一度は疑ったがどうやらこれは幻術などではなく、まぎれもない現実であるらしい。

「あれ？」

いつの間にか、図書室ともいえる場所に来ていたらしい。本が大量に置いてある。さすがに、図書館島などといったほどの規模はないが、相当な量がある。だが、残念なことにどれも読めない。

無理もない。

ここは文字通りの意味での異世界。当然のことながら使われている字も違う。

「まあ、当たり前だよな」

嘆息し、椅子に腰を下ろしたまま頬杖をついて思考を続ける。

リンディ達の話が事実なら、地球には早い内に帰れることだろう。だが、現在、旧世界 地球と、魔法世界へのゲートは閉ざされている。あの決戦の場に戻るのはかなり難しいように思える。

いや、そもそもだ。

さらに疑問が浮かんできてくる。そもそも、どうして時空管理局というほどの組織の事がこれまで地球に伝わって来なかったのだろうか。逆に、地球側が管理局の存在に気づかなかったのか。

発想をさらに進める。

これらの疑問に納得の出る答えは、

「あのー、どうかしましたか？」

「え？」

声のした方に振り向くと、そこに立っているのは栗色の髪の毛をした同年代ほどと思われる優しい眼差しの少年だった。傍らにはかなり分厚い本を抱えている。

「あ、ああ。失礼しました。僕はユーノ・スクライアっています。あ、ユーノっていう方が名前です」

そう言っぺこり、と一礼して見せる少年。  
それに対し、ネギも慌ててお辞儀しながら返した。

「ど、どうも。ネギ・スプリングフィールドです」

「急に声をかけたりしてすみません。何か悩んでいる様子だったもので」

「あ、いえ。その、別に大したことでは……」

「そうですか？ 随分と悩んでいるように見えたんですが……」

ユーノと名乗った少年は、心配そうに上目遣いの瞳でこちらを眺めてきた。

そんなに悩んでいるのうに見えたのだろうか、と少し不安になりながらもネギは慌てて手を振って返した。

「いえ、その。別にどうってことないことなんです。ただ、この世

界の文字が分からないで困っていただけで……」

その言葉にユーノは納得した様子で「ああ、なるほど」と手を打った。

「管理外世界の人でしたか。だったらこの世界の文字を知らなくても無理はありませんね」

「は、はあ……」

厳密に言えば、管理世界や管理外世界といったことよりもさらに複雑な事情があるわけだが、余計な混乱を招きそうなので丁重に横に避けておく。

それにしても世界が違ふとなると字まで読めないのか。こうなると、色々と厄介なことになりそうだ。

そんなふうを考えていると、ユーノは「うーん」と暫く唸った後、こう言った。

「良かったら僕が読んであげましょうか？」

「え？」

「一応、僕はこの世界の字が読めますし」

「いえ、そんな。悪いですよ」

「気にしないでいいですよ。困っている人がいるならば助けるのが当たりまえですから」

ね、とそう言っただけユーノは微笑んだ。

「は、はい」

「それじゃあ、どの本を読みます？」

そう言われて、ネギは困惑気味の顔をした。

そもそも何か読みたい本があつて来たわけではない。

だが、せっかく親切で言ってくれているユーノにそう返すのは憚られる。

どう答えるべきか、とネギが悩んでいると、不意に先程からユーノの持っている分厚い図鑑が目に入る。

「え、えっと。じゃあその本で」

「え？　これですか？」

ユーノは意外そうな顔をする。

それも無理はない。彼の持っているのは、古代のアンティークの資料集というものだった。

そのようなものに興味を持つ人間が、同世代にいたとは思ってもしなかったのだろう。

「えっと、これは古代ベルかに存在していたと言われる祭殿用の礼装の一種で……」

自分の趣味を他人に話すのが嬉しいのはどこの世界でも共通らしい。意気揚々とした様子でユーノはページを捲り、そこに書かれてある文章の解説をはじめた。

ネギにとっては知らない単語ばかりだ。だが、それでも元々アンティーク好きの性格のせいかな、興味津々といった様子で聞いている。ユーノも趣味の話をするのが楽しいのか、上機嫌のまま本を読み進めている。

そんなこんなであつたばかりにも関わらず友情を築きつつある二人だったが、そこに新たな入室者があつた。

「良かった、ここにいたのか」

質実剛健、という言葉が良く似合う黒目黒髪の少年だ。

「えっと、あなたは……」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

クロノが簡単に自己紹介をする。

ネギと一緒にいるユーノの姿を見て、やれやれと肩をすくめてみせた。

「なんだ、フレットもときも一緒だったのか」

「クロノ！ 誰がフレットだ！」

「まあ、そう怒るな。場を和ませるための軽いジョークだ」

「どこが和んでいるんだ！」とかみつくように怒鳴るユーノだが、年季の差なのかクロノは飄々としている。

「あの、フェレットもどきって何ですか？」

ただ一人、二人の会話の意味が分からなかったネギが問うように聞いた。

「ああ、それはだな。そっちの彼は実はフェレット素体の使い魔の一種でな。その事から……」

「だ・か・ら！ あれは、魔力の消費を抑えるために緊急的にやっていただけわけであって、僕は立派な人間だって何度も説明しただろう！」

「そうだったか？ 動物形態の方が自然な感じがしていたから全く気にならなかったんだが」

惚けたように肩をすくめるクロノにユーノは抗議するように怒鳴るが、クロノは気にした様子もなく受け流していた。

だが、二人の間に険悪な雰囲気はなく、むしろ仲の良い兄弟喧嘩を思わせてむしろほのぼのとした気分にするなれる。

「……まあ冗談はこの辺にしておいて、本題に入るか」

クロノは顔を真面目なものへと変え、ネギの方を見据えた。

「君を艦長が呼んでいる。こちらに来てくれ」

「は、はい」

なおも不満そうに唸っているユーノを残し、ネギはクロノの案内する場所へと移動した。

## 2話

クロノに促されるまま、ネギはアースラの廊下を歩く。

「艦長、クロノです。彼をつれてきました」

とある一室の前に立ち止まり、クロノが口を開いた。  
部屋からの反応はすぐにあった。

「どうぞ」

その言葉が聞こえると、すぐに扉が横に割れた。

「さ、こちらに」

「は、はい」

クロノの後ろに続き、その部屋へと入り、部屋の内装が目に入る。  
豪華とは言いがたいが、落ち着いた雰囲気を持つ一室だった。  
机を挟んで対になるように置いてあるソファーと観葉植物。それに、落ち着いたタッチの絵が壁に飾ってある。

そして、こちらから対になる側のソファーに一人の女性が座っている。

目覚めてから初めてあった女性・リンディ提督だった。

「よく来てくれました」

そう言うてにつこりと微笑む。

彼女は提督という肩書きを持つが、軍人らしさはあまりしない。むしろ、見る人に安心感を与える母性的な一面が強く出ているように感じられた。

「提督、僕はこれで」

そう言うつと、クロノは軽く敬礼してから入り口付近から立ち去る。それを確認してから、リンディは口を開いた。

「さて、そんな所に突っ立っていないでソファアにどうぞ」

「は、はい。ではお言葉に甘えて……」

そう言いながらソファアへと腰を下ろした。

テーブルには紅茶の入ったカップが置かれている。

「どうぞ」

リンディは紅茶を勧めた。

本来ならば、リンディも異邦人であつても落ち着ける空間を作ってたかった。しかし、今回は残念なことにそれらのセットを用意する時間がなく、簡潔なもてなしとなってしまったのだ。

とはいえ、ネギはそのような事に気を悪くした様子もなく紅茶を口に運んだ。だが、状況が状況だけに緊張しているせいかあまり味は感じられなかった。

一口だけ飲んで、紅茶をソーサに置くと、それを見てからリンデ

イは口を開いた。

「早速ですが、先程の件の調査が終了しました」

その言葉に「ごくり」と唾を飲み込む。

「貴方の言っていたように日本もイギリスも存在していました」

その言葉に一瞬、喜色を浮かべるが、リンディは厳しい顔のまましかし、と続けた。

「残念ながら、麻帆良という街。それは存在していなかったようです」

「！」

その言葉にネギは衝撃を受ける。

麻帆良は、裏的には言うに及ばず。表社会でも世界最大の学園都市として知名度は相当に高い。

その存在すら見つけられない、ということはありえないはずだ。

……とはいえ、その衝撃は予想していたよりも小さい。それは、時空管理局という存在を知った時点でうすうす予想はしていたからかもしれない。

少し話を聞いただけだが、管理局というのは相当に大きな組織らしい。それほどの組織がいかにも隠匿しているとはいえ、地球の魔法文明の有無を見落とすというのは極めて考えにくい。

となると　だ。

大凡ながらその答えに察しがついた。

だが、それでもその結論をはっきりと出すのに躊躇った。

そんなネギを同情的な顔で見つめてからさらに、と続けた。

「地球に魔法技術が本当にないかどうか改めて調べてみたのですが、調査結果はやはり白です。魔法技術が地球に存在している痕跡は全くありません」

それは短時間な調査ではあったが、正確だった。

少なくとも一部の例外を除いて、魔力すら持たない人間がほとんどだった。さらに詳しく調べる必要もないことだろう。

ですが、と言葉を切ってリンディは続ける。

「考えたくはない事ですが、貴方が嘘をついている、もしくは何らかの思い違いをしているという可能性もありました。しかし、それにしてはこの97管理外世界と一致する点があまりにも多いのです」

「……」

ネギは無言だ。

ただ、リンディの言葉を黙って聞いている。

「平行世界、という概念をご存知ですか？」

リンディは不意に話題を変えた。

しかし、なぜこんな事を言い出したのかネギは大凡の察しがついた。だが、それでも無言のままだ。

……その結論を出したくはなかったから。

「次元世界とは違う、異なった可能性世界。例えば、私が飲んでるのは緑茶ですが、『もし』これが紅茶だったのならば。今ここに置いてあるお菓子は羊羹ですが、これが『もし』お饅頭だったら、そんな些細な可能性で無限に枝分かれした可能性の先にある世界。

……ここまで言えば分かりますが」

ごくり、と茶を含み、それから数秒の間があった。

まだ10歳程にすぎない少年を相手に、その言葉をズバリと口にすることに、多少の躊躇いがある。

しかし、いずれは言わなければいけない事。  
避けては通れない事だ。

「おそらく、十中八九、貴方の暮らしていたという世界はこことは違う可能性の地球。『麻帆良』という土地が、そして『ネギ・スプリングフィールド』という人間が存在する別世界。私達の知る地球ではありません」

「　　っ！」

ネギはその言葉に再び衝撃を受ける。

麻帆良がないと聞いた時点でこの薄々と感じてはいた。しかし、実際に改めて言葉にされるとやはりショックは大きい。

リンディは相手を気遣つてのためか、あるいは衝撃から立ち直るのを待ったためか、即座に続く言葉を発しようとはしない。

「……」

「……」

沈黙が場を支配する。

静粛な空間だ。双方、何も言葉を発しはしない。

「……僕は」

ネギが唇を動かしたのは数分ほど経ってからだった。

「僕は、帰れるのでしょうか？」

リンディは、そんなネギの様子を見て半ば感心した。

顔に困惑や衝撃の色こそ浮んではいるものの、パニックになったり泣き喚いたりする様子はなく年不相応なまでに毅然とした様子だ。

（まあ、年不相応といえばあの子達もだけどね）

ここで内心で苦笑する。

P T事件で重要な役割を演じた3人の少年少女の事を頭に浮かべる。自身の息子でもあるクロノもそうだが、どうも自分の周りには年不相応ともいえる子供ばかりが集まってくる。

「それは、現状では何ともいえません。何せ、私の知る限りでは前例がありません」

もし、相手が年不相応ともいえる少年であつたのなら、虚言で誤魔化そうとも考えていた。

しかし、目の前の相手は思った以上に聡明だ。

誤魔化さずに事実をそのまま告げた方がいいと判断した。

「……そうですか」

案の定、ネギは多少のショックを受けている様子ではあるもののそれほど取り乱した様子はない。

だが、カップを持つ手がわずかに震えている事を目敏く見つけた。

そんな彼を安心させるように、即座に次の言葉を繋ぐ。

「それで、これから先の貴方の処遇なのですが、当分の間は生活の保障を時空管理局がしますのでご安心を」

そこまで言ってリンディは再び茶に口をつける。そこではじめて冷め切っている事に気がついた。

その茶をもう一口飲んだ後、リンディは会話を続ける。

「無論、貴方が元いた世界へと帰る為の調査もこちらが責任を持って行いますし、その間の衣食住はきちんと保証します」

「……分かりました。お世話になります」

ネギは頷いた。頷く他ない。

その様子にリンディは微笑むと、

「それじゃあ、早速なのですが詳しい調書を取りたいので貴方がこちらに来る前の詳しい話を聞かせてくれませんか？」

「は、はい」

リンディに言われ、こちらに来るまでの記憶を引っ張り出す。  
そして、一つずつ話していき、最後の部分。ここに来る直前の辺りまで話が進んだ。

そこで、ふと思い出した。この世界に来る直前。最後に戦った相手はこう名乗っていたことに。

魔導師。

もしかしたら。

「あの……何か書く紙はありませんか？」

「紙？」

リンディは一瞬怪訝そうな表情を浮かべるものの、即座にメモ用紙を探し出し、目の前に置いた。

「これでよろしいですか？」

ありがとうございます、と言ってからネギはその紙に書き始めた。  
直前に見た、紫色の魔方陣の絵を。

「これは……」

リンディはそれを見て思わず唖った。  
その紙に書かれた魔方陣は間違いなくミッド式魔法の象徴ともいえる、魔法陣が描かれていたのだから。

「この世界に来る前……この絵にかかれた魔法陣を使った魔法と使う相手と出会いました。さらにいえば、その相手は『魔導師』と名乗っていました」

魔導師……。

リンディはその言葉の意味を考える。

彼のいる世界では魔法使いのことを魔導師、と名乗ることはまずないらしい。さらには、ミッド式魔法を使う相手。明らかに怪しすぎる。

「なるほど。確かにその魔導師が原因である可能性は高いようね……」

とはいったものの、現状では手がかりが少なすぎる。その魔導師が何者なのかもわからない。

事実上、調べようがないのだ。

しばし沈黙が流れた後、リンディは話題を転じた。

「ところで、ですが。こちらの地球に行ってみる気はありませんか？」

「地球に？」

「幸い……というべきでしょうか、私達は近い内に貴方の件とは別件でこちらの世界の第九十七管理外世界　地球に行く予定になっています」

暫し間を置いてから、リンディは続ける。

「十中八九　いえ、まず間違いなく貴方のいた地球とは違うとは思いますが何らかの手掛かりがつかめる可能性だって皆無ではありません」

「……」

暫し、黙考する。だが、やはり彼女に、というよりも彼女たちの言葉に従う他に道はなさそうだ。

数秒ほど経った後、静かに首を縦に振った。

「わかりました。お言葉に従います」

こうして、第97管理外『地球』へと向かうアースラでの同乗が決まった。

その後、アースラで過ごすにあたっての、簡単な注意事項を聞かされてから自室へと戻った。

### 3話

日が沈み、新たに日が昇り、再び一日がはじまる……と言いたいところではあったが、次元航空艦・アースラの中では日の出などは見えない。

だが、ベッドの近くに表示されている無機質なデジタル時計だけが、現在の時刻を教えてくれている。

時間にして、朝の6時30分。

早起きの人間ならば、すでにベッドから起き始めている時間。

そんな時間に、ネギは目覚めた。

「ん……」

辺りの光景を見渡す。

リンディよりあてがわれた一室は、とりたてて豪奢ではないが、質素でもない。ベッドと簡素な机と椅子が置いてあり、駅前などにありそうなビジネスホテルの一室のような部屋だった。

その部屋を見渡し、ネギは改めて状況を確認する。

「……やっぱり、昨日の事は夢じゃないか」

当然といえば、当然の事ではあるが、一晚寝たところで現実は変わってくれなかった。はあ、と思わず嘆息する。

とはいえ、このまま横になったところで事態は好転しまい。小さく伸びをすると、寝間着を脱ぎ捨て、新たに服を着る。なお、文字通りの意味で身一つの状態で跳ばされているため、変えの服な

ど持っていない。今着ている服は昨日、リンディから借りたクロノのお下がりの私服である。ちなみに、お下がりといってもクロノが10歳頃に着ていたものではなく、12歳頃に着ていたものだった。りするのだが、この際は関係ない話である。

着替えた服のまま、ベッドに腰をあげ、外へと出て行つた。

アースラ内部を適当にうろつきはじめた。

しかし、出会うのは面識もろくにない局員ばかり。ちらちらと、こちらを好奇の目で見る者はいても、話しかけてくるものはいない。

思えば、暇をもてあますなどという時間は何時以来だろうか。

麻帆良に来てからも様々な経験、事件の連続であり、暇をもてあますような時間などほとんどなかった。

魔法世界に来てからも同様である。

それなのに予期せぬ形で長く、退屈な時間を与えられて困惑すらしていた。

「適当に辺りをうろついてみようかな……」

ゆっくりと立ち上がって、探索を続ける。

基本的に立ち入り禁止と書かれている部屋以外ならば、自由に行動していいと言われている。

ならば適当に探索をしたぐらいで怒られる事はまずないだろう。

「ここは……」

何という事もなしに歩いていて、たどりついたのは白い空間。

それは、学校の体育館などのようにやたらとだだっ広い空間ではあるものの、何も置いておらず、少しばかり寂しさすら感じる場所だった。

しかし、埃や汚れもほとんど見られず、しっかりと掃除が行き届いている事も分かる。

「変なところにたどりついちゃったけど……ここは何をする場所なのか？」

見慣れぬ場所にたどり着いて事で、少しばかり困惑の声をあげた時、

「ん？ 君か。どうかしたのか？」

ふと、昨日聞いたばかりの声が背後から響いた。

振り返ると、黒を基調としたバリアジャケットを纏った黒目黒髪

の、時空管理局執務官であるクロノ・ハラウンがそこにいた。

「クロノさん……と、えっと」

不意に、背後にいた二人に気づいた。

片方は、肩の辺りまで伸ばされた長い金色の髪の毛。それに、ルビーのように紅い瞳を持つネギと同世代程度と思われる少女。

もう片方は、茜色の長い髪の毛を持つ十代の後半から二十代の前半といった程度の年齢と思しき女性。

だが、こちらの女性は明かに人間としてはありえない特徴があった。

具体的に言えば、頭の辺りに。

そこには、ちょこん、と。犬科の獣の象徴である耳が。お尻の辺りからは尻尾がひらひらと揺れていた。

だが幸いに、というべきか。魔法世界で多くの亜人達を見てきたせいか、彼女の特徴にはあまり違和感を感じなかった。

「ああ、彼女達は……」

とクロノが言いかけるのよりも早く、犬耳の女性の方が、

「ああ、あたしはアルフ。よろしくね。そしてこっちが……」

と、金髪の少女を押し出すように前に出す。

「ふえ！？ あ、あの、フェイト・テストロッサです……」

少女は、人と話す事になれていないのか、視線を合わせないまま自己紹介する。

その名前に、ネギは硬直した。

「フェイト、なのはからも人と話す時は目と目を合わせて話そうって言われてたじゃないかー、ちゃんと視線を合わせて話そうよ」

やや苦笑した様子で、アルフがフェイトと名乗った少女に苦言を呈する。

それに対してフェイトも照れたように、赤面したままアルフに返す。

「う、うん。そうしようとはしてるんだけど、それでもまだなかなかねなくて……」

「そんな事言ってもさ」

二人が話している間に、段々と硬直状態が解けていく。  
どうやら、目の前の少女は自分の知る同じ名前を持つ”彼”とは完全な別人らしい。そう確信したのとほぼ同じくらいに、アルフがクロノに疑問を投げかけていた。

「ところでクロノ、この子が地球出身で管理世界で育ったっていう魔導師かい？」

「え？」

ネギが慌ててその言葉を訂正しようとする、頭の中に声が響いた。

『すまない。説明するのを忘れていたが、僕や艦長のような一部の局員を除いては君が平行世界の地球から来たという点に関しては話していない。問題がこじれそうだったからね。申し訳ないが、話を

合わせてくれないか？」

『は、はい……』

ネギがクロノにだけ分かるように小さく頷いた。

「ああ、そうだ。彼の父親は地球人んだけど母親の方がミッドチルダ出身の魔導師でね。生まれてから長い間ミッドで育ったんだけど最近、父親の生まれ故郷の地を一目見てみたいと彼は考えていたんだけど、管理外世界への便などほとんどなくてね。そんな時に都合よく僕たちが地球に行く事になったんで、同行する事になったんだよ」

淀みない口調で、クロノが説明を加える。

実際、ネギも詳しくは知らない事ではあるが、管理外世界出身であつても何らかの都合で管理世界と繋がりを持ち、管理世界へと移住してしまう管理外世界の住民は意外と多いらしい。

そのせいか、アルフもフェイトも不信感を抱いた様子はまるでなかった。

「そっかー、まあとにかくよろしくね」

「は、はい。ありがとうございます。ところでクロノさん達は、一体ここに何をしに？」

これ以上この話題が長引いてしまうと面倒な事になりそうだったためか、話題を別の方向へとずらした。

「ああ、そうだった。忘れていたよ」

と手元に浮かんでいるタッチパネルを、クロノは巧みに操作し始める。

ぼち、とタッチパネルを強く押しながら言葉を続ける。

「これは、訓練用のシミュレーション空間だよ」

クロノがそう言ったのとほぼ同時に、ガラスの向こう側の何もなかった空間が、豊かな木々や、緑が生い茂る森へと変化した。

「な……」

そんなネギの反応には、慣れているのかクロノはそのまま手元に表示されているタッチパネルを操作し、手元の映像を動かす。

「これからフェイトは戦闘訓練をするところだったんだ」

（凄い……）

その光景に、思わず感心した。

こちらの魔法は、リンディの説明などから、ファンタジックな神秘的の要素よりも、『技術』としての面が強く強調され、技術的な方面に特化している印象が強いと思っていた。

そして、それは目の前の光景によりいっそう強く感じる事ができた。

（これがこちらの世界の魔法……）

なお、彼のいた世界の”魔法”もこれに負けられないような技術はあ

るものの、それは方向性・応用性の違いというものだろう。

「あの、クロノさん。少し訓練の様子を見せてもらってもいいですか？」

ネギの問いに、クロノはフェイトの方を見る。が、フェイトにも特に異論はないようだった。黙って頷く。

「別に構わないよ。でも危ないからあまり近寄らないようにしてくれよ」

クロノの返答に、ネギはありがとございますと言ってから、近くにあった椅子に腰を下ろした。

「それでは、はじめる。準備はいいか？」

クロノにかけられた言葉に、フェイトは短く頷く。

（この半年間で、私の技術も随分と向上したと思う。だけど、なのはだって以前会った時よりもっと成長しているはず……）

彼女に脳裏に浮かんでいるのは半年前には敵として何度も戦った白い砲撃魔導師の少女だ。

その少女とは、今は敵ではない。互いに競い、高めあう好敵手だ。

”全力”で戦う事はあっても、”本気”で戦う事はもう二度とあるまい。

だが、それでも。

彼女と肩を並べる事のできる魔導師に、彼女を守る事の出来る魔導師になりたい。

「はじめっ！」

クロノの言葉と共に、周りに出現した訓練用の傀儡兵が動き出す。傀儡兵といっても、所詮は訓練用のものにすぎず、大して強くはないし、動きも単調だ。

轟！ と傀儡兵の抱えられた砲台から紅い光線が放たれる。が、フェイトにとってその一撃は遅すぎる一撃だ。

いとも簡単にかわし、巨大な戦斧を傀儡兵に叩き下ろした。華奢な少女の一撃とは思えないほどその一撃は重く、傀儡兵はその一撃で戦闘能力を失い、その巨体を崩れ落ちた。

さらに、傀儡兵が出てくる。

今度は先程の傀儡兵のようなパワーはないようだが、とにかく数が多い。

先ほどのように、一体一体を相手にしてはきりがない。そう考え、傀儡兵達を囲むようにフェイトは魔法陣を展開させる。さらに、周辺に金の光の群を出現させる。

フォトンランサー。

フェイトの得意とする射撃魔法であり、その威力は並の魔導師であれば一撃でも脅威になりえる攻撃だ。

「撃ち……砕け！」

フェイトの言葉と共に、まるで命令を受けた兵士達のように、金の光が傀儡兵に向かって動き出す。

凄まじい轟音が響き、金の光が傀儡兵達に命中する。

それも、一発一発が一撃必倒の威力だ。精度も良い。ほぼ全てのフォトンランサーが、傀儡兵にのみ向かっていく。はずだった。

それは、ちょっとした調整ミスだったのか、内一発の、ランサーの軌道が大きくそれた。

そのまま一直線に、出会ったばかりの赤毛の少年へと向かう。

「っ！」

しまった、とフェイトは思う。

完璧を心がけていたのに、こんな失態を犯してしまうとは。

せめてもの幸いは、現在使っていたのはミッドチルダ式の魔法で利用できる非殺傷設定だというくらいか。

だが、それでもまともにぶつかれば痛いし、ダメージを受けたシヨックで気絶してしまう事だってありえるのだ。

今から助けにいつても、すでに間にあわない。位置的に考えてもクロノやアルフがかばうのも不可能だろう。

バシュッ

鈍い音がした。

最初、フェイトはその音が少年に魔力弾が当たった音なのだった。

が、それが違った事にすぐに気づいた。

「  
」

今一瞬、彼の手に小さな魔法陣のようなものが展開されていた。

彼は、バリアジャケットなどは着ていないし、デバイスを起動させた様子はない。だが、彼はそんな事は関係ないかのように何らかの魔法を展開して魔力弾がぶつかるのを防いだのだ。

その事を怪訝に思う事よりも、謝罪の言葉が先に出た。

「す、すみません！ 大丈夫ですか？」

フェイトは慌てて駆け寄った。

見ると、クロノもシミュレーション空間をいったん消してから来てくれている。

「大丈夫か？ 直撃はしていないし、非殺傷設定だから大丈夫だとは思うが……」

そう言いながら魔力弾の当たった場所を確かめ、ほっとしたように息をついた。

「良かった……」

フェイトもほっとしたように胸に手を当てる。  
それはアルフも同様のようだった。

（良かった……）

目の前にいる少女・フェイトやアルフとは別の意味でネギは安心していた。

魔法発動体である、指輪を見つめながら軽く一息する。

常識から何もかもが違う、こちらの世界の”魔法”では、もしかしたらこちらの世界では使えないのではないかと不安にも思っていたがどうやら杞憂らしい。

実際に、魔法はしっかりと発動している。このアースラにいる限り、戦闘になるようなことはまずはないと思うが、それでも魔法が使えるという事実はネギを大きく安心させていた。

その時、訓練室のドアがスライドし、緑色の髪を持つ女性が入ってきた。

「あら、ちょうどいいわ。二人ともここにいたのね」

すでに知っている顔、リンディ・ハラオウン艦長だ。

「あ、提督」

「リンディさん」

その姿を認め、各々が反応する。

それに対し、リンディもにっこりと笑って返した後、ネギとクロノの方へと視線を動かした。

「ちょっと、二人にお話があるの。応接室まで来てくれるかしら？」

## 幕間1（前書き）

区切りのいいところで切ったら、過去最短になってしまいました！  
…。

## 幕間 1

その出会いは今から10年以上前の事だ。

当時、男は一人の次元漂流者の青年を保護した。

どこからどのようにこの世界に流れ着いたのか、それすら不明だったその青年の身元引受人に男はなった。

理由は、男がその青年を見つけた張本人だったというのもあるが、何よりも同一世界の、しかも同じ国の出身者だと思われたのが一番の要因だ。

だが、その青年と会話を重ねていくと、どうもそれは違うらしいことが分かった。

男の世界と、青年の世界はほぼ同一の世界ではあったが、それでも完全に別の世界だった。

特に、男の世界の”魔法”と青年の世界の”魔法”。これは、呼び名こそ同じだったものの、完全に別物といっていい程の差があった。

青年は、元の世界の英雄と呼ばれる存在だったらしく、英雄という名に恥じないだけの実力もあった。

そして、実力だけでなく性格も出鱈目にして滅茶苦茶だった。

少し街に出てくるといつて出かけたかと思えば、犯罪組織のアジトを壊滅させて帰ってくるし、少し局の訓練所を見たいと言いつたかと思えば高ランク魔導師にいきなり模擬戦を申し込んだりする

始末。

だが、無茶苦茶ではあったが、決して不快感を感じさせることのない性格でもあった。

さらに、単に高い実力を持つだけではなく、人を自然と惹きつけるカリスマ性や、高い人望も持っていた。

だから、だろうか。

その青年は、男とはまるで違う人間だ。全く違ったタイプの人間ではあったが、自分に持ち得ないものを持っている人間だったこそ、男はその青年と友好な関係を維持できたのかもしれない。

そして……、

そこで、男の意識は覚醒した。

（寝てしまっていたのか……）

そこは、決して派手ではないが高級な素材で作られているとわかる家具が置かれている。

派手すぎる家具や、私物らしいものもほとんど無く、質実剛健、

という言葉が良く似合う一室である。

その部屋の主である男性が、そのソファの上で目を覚ました。

男の名を、ギル・グレアムという。

時空管理局提督。かつては艦隊指揮官。執務官長などを勤めたこともある歴戦の勇士である。

その彼が、つい自室で眠ってしまっていた。

非常に珍しいことではあったが、ここ最近はそれだけ忙しい日々を過ごしていたということなのかもしれない。

（それにしてもなつかしい夢だった）

今見たばかりの夢の内容を、グレアムは思い出す。今から10年以上も前に出会った、一人の友人との出会いと別れ。

その記憶は、今でも鮮明に思い出せる。

そして、何故このような夢を見てしまったのかもよく分かる。

グレアムは、ひそかに手元のテーブルに載せられた資料を両手で持ち上げる。

「まさか……よりによってこんな時期にとはな」

誰にともなくグレアムは呟いた。

その声は、とてつもなく重くて暗かった。

「せめて　もう1年早くか、あるいは遅ければ良かったのに」

そうすれば、何も考えずに歓迎する事ができた。

だが、悲願成就が目前に迫ったこの時期に不確定要素が増えてし

まうのは決して歓迎するべきことではない。

グレアムが複雑そうな表情のままソファに腰を下ろしていると  
ノックの音がした。

「父様」

入って来たのは、頭から猫耳を生やした女性      グレアムの使い  
魔であるリーゼアリアだった。

「アリアか……」

その姿を確認すると、グレアムは暗い表情を変えた。自身の使い  
魔とはいえ、いや使い魔だからこそ、余計な心配をかけるべきでは  
ない。

「ただいま戻りました」

軽く頭を下げてから、アリアは唇を動かし話し始める。

「闇の書の主に関しては、特に動きはありません。いつも通りの日  
常を送っているようです」

傍から聞いていたら、何が何だか分からないくらい急な話の切り  
出だ。

だが、グレアムはそれに困惑することなく頷く。

「      守護騎士達の蒐集の方は？」

「順調のようです。このペースだと来年のはじめ      いえ、年末の

あたりに全てのペー  
ジを埋めてしまえるかと。 ……ただ」

「ただ、何だ？」

「どうやら、我々以外にも闇の書を監視している者がいるようです」

「何？」

アリアの発言に、グレアムは思わず目を見開いた。

それは容易ならざる事態だ。そもそも、闇の書の実在は世間に知られていても、現在の主に関する情報など一般には  それどころか管理局ですら把握していない。

グレアムは、あくまで個人の調査により、いくらかの幸運も味方して主の場所を特定できたにすぎず、しかもその事を”ある目的”のために管理局には報告していないのだ。

「どのような相手だ？」

「……そこまでは。しかし、闇の書の主の周りにサーチャーをとばしたりしているようです。それ以上の行動は起こしていませんが、闇の書の主を監視していることは間違いないようです」

「……そうか」

難しい顔をしてグレアムは黙り込む。

そして、長年の経験で培った頭脳を高速度で回転させた。だが、現時点では情報が少なすぎて判断がでかねた。

「完成した闇の書の力を利用しようとするものか……あるいは私達

のような私怨で動いているのか、そのどちらかだろうな」

「おそらくは」

そう答え、アリアは黙り込む。

暫く、沈黙が部屋を支配した。

どちらも言葉を発しない、重苦しい空気だ。

くい、とそんな中グレームは注がれていた紅茶を口に運んだ。

淹れた時には湯気もたっていた状態だったにも関わらず、すでに冷たくなっている。気がつかないうちに相当な時間がたっていたらしい。

「……あの」

言いづらそうな口調で、アリアが沈黙を破った。

「どうした？」

「その、今度こそ、無事に終わりますよね？」

その声には若干、不安そうな色が混じっている。

まるで、そうであって欲しいと願っているかのような、そのような口調にも聞こえた。

「ああ　終わるさ。必ず」

自分にも強く言い聞かせるように言うと、再び紅茶を口に運び力ツプの中身を空にする。

そして視線を、机の上に飾ってある写真立ての方へと動かす。そこには、4人の男女が映っていた。今よりも幾分か若い姿で写っているギル・グレアム。それに、今と変わらぬ姿で写っているリーゼロッテとリーゼアリア姉妹。  
そしてもう一人。

そんな写真を眺めて、グレアムは呟いた。

「君なら、私の判断を嘲るかな？ いや、今となっては意味のない事とか」

その写真立ての裏には、やや乱雑な。しかし、力強い文字でこの写真に写っている最後の一人の名前が書かれてあった。

『ナギ・スプリングフィールド』と。

## 4話

海鳴市は、比較的温暖な気候な土地である。

しかし、それでも現在が12月という事もあり寒風が激しい。雪こそ降ってはいないものの、気温も低い。

その海鳴の街の、人気のない場所に二人の少年が姿を現した。現れるというのは何かの比喻ではなく文字通りの意味で、だ。

「ここが日本……」

転移魔法用の魔法陣の上で、ネギは呟くように言った。それに対し、クロノが答える。

「そう。君の言う地、麻帆良市、だったかな？ その街があるはずの場所に麻帆良という都市はない。変わりにあったのはこの海鳴市だよ」

「……」

その言葉にネギは黙り込み、アースラでのリンディとの会話を思い出していた。

「これは……」

アースラの一室。

その一室で、一つの映像が映し出されている。それは、一見どこにでもあるような住宅街だった。

少なくとも、ネギには見覚えがない。

しかし、クロノの方は違ったようだ。いくらかの間をおいてから、言葉を発する。

「艦長、これはもしかして……」

「ええ、ここは日本の海鳴市という街よ」

リンディは首を縦に動かす。その言葉で、クロノも自分の記憶が間違っていないかったことを再確認する。

今、映像に映し出されているのは海鳴市。半年前のP・T事件の舞台となった街だ。

が、確認すると同時に疑問が浮かび上がる。なぜ、いまさらこのような映像を見せるのか、という疑問だ。

だが、その疑問の答えをリンディは口にした。

「実はね。ネギ君の言っていた麻帆良という街のある場所の住所ここだったわけよ」

「……?」

「ええ、麻帆良市の住所を調べた結果がここ　この海鳴市」

「どついうことなのでしょう?」

ネギに変わって、クロノがたずねる。だが、リンディは黙って首を横に振った。

「分からないわ」

少し間をおいてから、リンディは続ける。

「私達が発見したネギ君の住んでいたという場所が、たまたま私達の縁のある場所だった。ただの偶然と片付けることも出来るけど…」

そこまで言いかけたところで、リンディの言葉が遮られた。

「……そこに」

「？」

「その海鳴市に行かせてくれませんか？」

ネギの言葉がある程度予想していたのか、意外そうな顔をせずにリンディは頷く。

「確かに、貴方が住んでいたという街と全く同じ土地。調べてみる価値はあると思うわ」

首を縦に振り、リンディは頷く。

「確かに、実際に貴方に現地にもらってもらった方がいいでしょう。許可します」

そして、現在。

海鳴市へと到着し、同行しているクロノと共に街を歩いている。

「やっぱり、麻帆良という地は存在しないんですか？」

ネギがクロノにたずねるように聞いた。

それに対し、クロノがああ、と頷き、

「何度調べなおしても結果は同じだった。この世界には、君の。そして、君の関係者だという人たちの戸籍は存在していない。無論、麻帆良という地も」

断ずるような口調でクロノは告げる。

一見、彼の物言いは冷酷に見える。しかし、決して悪気があつて言っているわけではないし間違いでもない。

現実を正しく認識させないでいる方が、はるかに残酷だ。

「……」

そして、その事はネギも分かっていた。

だが、分かっただけではいても万が一の望みを捨てる事はなかなか出来なかった。

街を歩き続ける。それは、普通の日本の市街地といって良かった。歩き続けることに 認めたくないことだが ネギの知る土地との相違点が見つかる。つてくる。

「確かに……麻帆良としてはありえないですね。明かに町並みが違うし……何より、世界樹が見あたりません」

「世界樹？」

クロノが怪訝そうに聞き返した。

「正確には神木・蟠桃と呼ばれる270メートルの巨大な樹ですよ」

「何だそれは？」

やや呆れ気味にクロノが言った。

それも無理はない。そのような存在、多くの管理・管理外世界を知るクロノからしても異色の存在なのだろう。

閉ざされた空間で育ったネギにとっては、当初、世界樹の存在を知った時にはさほど違和感を感じなかったが、そうでない人間にとってはやはりありえない存在なのだろう。

それはともかく、世界樹が見えないというのはここが麻帆良ではないという大きな根拠となっている。

例え、どの位置にしようとも270メートルという驚異的な高さを誇るあの樹が見えないなどということがないというのはまずありえない。

だが、それが分かったところでどうということもない。ここが自分の知る地球ではないという可能性がさらに高まったただけだ。

ネガティブになりかけた心を必死に、振り払う。自分はこんなところで折れてはいけない。

必ず、生きて自分の生徒達の元へと帰らなければならぬのだ。

そう思い顔をあげると、たまたま図書館が目に入った。

さりげなく通り過ぎようとしたが、不意に一つの考えが浮かんだ。

「クロノさん、その図書館に行ってきたもいいですか？　もしかしたら、他にも細かい部分で差があるかもしれません」

「別に構わないよ」

特に断る理由もなく、クロノも頷く。

元より、彼の好きなようにさせるつもりであり、行動に制限などをかける気はない。

二人は歩き出し、図書館へと向かう。

その入り口にある自動ドアが、左右にスライスし、二人は図書館の中へと入った。

八神はやては、世間一般から見れば「不幸」という部類に間違いなく入るであろう少女である。

子供の支えとなるはずの両親はなく、下半身は原因不明の理由に

より付随の状態であり、車椅子での生活を余儀なくされている。そのような状態ということもあり、学校にも通えず、同世代の友人もいない。

しかし、父の友人である「グレアムおじさん」こと、ギル・グレアムという男性からの援助もあり、経済的には何不自由ない生活を送れているし、通院している病院の石田医師のように、自分の事を気にかけてくれる知人も皆無ではないのだ。それ以上に不幸な人間など世の中にはいる。

だが、9歳という年齢でもあり、本来ならばその不幸を嘆いても良かった。周りの人間に喚き散らしても良かった。だが、聡明な彼女はそのような行為に意味はない、騒いだところで何一ついいことなどないのだと分かってしまっていた。

それゆえに、現状の不満を言う事なく日常生活をそれなりに楽しむ日々を送っていた。

だが、そんな彼女に転機が訪れた。

それは、一冊の闇の書と呼ばれる魔導の書だ。

本来、所有者達に災いしか与えなかったという、その魔導書は、彼女に災いの代わりに家族を与えた。

烈火の将・シグナム。

鉄槌の騎士・ヴィータ。

癒しの騎士・シャマル。

盾の守護獣・ザフィーラ。

それは、はやての新しい家族の名前だった。

当初、守護騎士と名乗った4人の騎士達は、「道具」としてではなく、「家族」として扱ったはやての対応に当初こそ戸惑いを覚えたものの、次第に打ち解けていった。

だが、この世界に現出した当初はほぼ例外なく全員で行動していたものの、日が経つにつれ、個人行動が多くなった。

シグナムは道場で剣の指南。

ヴィータは老人達とゲートボール。

シャマルは近所の婦人達との会談。

ザフィーラは……よくわからないが、それぞれのプライベートを持つようになり、個別での活動を開始していた。

当初のように5人全員で行動する機会こそ減ったものの、それでも誰か一人は付き人よろしくはやての傍にいる場合がほとんどだったのだが、この日は珍しく一人だった。

（まあ……自分の時間をもてるようになったのはいい事やけどな）

はやては、寂しくも思う反面、嬉しくもあった。

とはいえ、何もせずにいるのでは退屈である。

（あそこにもも行ってみよか）

頭に浮んだのは風芽丘図書館。

一人でいた時代からの、お気に入りの場所である。

考えるをまとめてからの行動は早い。

誰の助けも無いまま素早く車椅子に乗ると、車椅子を動かすはじめる。すでに何年間も車椅子生活を続けているだけの事はある、手早い動作である。

車椅子を動かすと、玄関を開け、外に出る。

鍵をかけたのを確認して家の外へと、車椅子を動かした。

「……」

道路の上を動きはじめ、数人の少年少女が目映る。

白い制服姿　おそらくは近所にある聖祥の　小学生達だった。  
背丈からすると、自分と同じぐらいの年齢だろう。

それをわずかばかりに羨望の混じった瞳で眺める。

家族が欲しい、という願いこそ叶ったものの下半身は相変わらず動かないままだ。このような状態ではまともに学校生活を送るのは難しい。

とはいえ、これ以上の事を望むのは高望みというものだろう。

そう考えたはやては、車椅子を動かした。

すでに何度も行き来した道筋ということもあり、図書館にはすぐについた。

平日の昼間ということもあり、人の出入りは少ない。さらに言えば、学生は学校に通っている時間でもあり子供の姿ははやて以外、一人もいなかった。

が。

「……？」

一人もいない、というのは間違いだったようだ。

一人の少年の姿がはやての視界に映っている。

背格好からすると、自身と同等程度の年齢の赤毛の少年だ。

（外国人の子　？）

この海鳴市は、渡来から来る人間も多い事で有名だ。金髪や茶髪の人間も珍しくない。

それほど不自然でもないか、と思い直した。

ここで、今読んでいるシリーズものの本を探し始める。

ジャンルはファンタジーに分類される物語。

騎士が、悪い魔物からお姫様を助けるといった典型的な王道物だ。

元々この手の話は好みだったのだが、本物の魔法使いやら騎士やらと同居する用になってからは何とも複雑な気持ちもする。

今はこの場にはいない騎士達の事を頭に浮かべつつ、はやては目的の本を探し始めた。

小説のコーナーの、ファンジーものが置いてある場所にそれはあるはずだ。

よく通っている図書館は、はやての庭同然だ。即座に目的の本は見つかったが、その本が置かれている場所を見て首をかしげる羽目になってしまう。

本来なら、小学生低学年程度の児童であつても手の届く範囲にその本はあつた。

しかし、残念な事に車椅子に座っているはやてには届かない距離だ。

むう、と唸り、手をあげる。

だが、それでも目的の本までは届きそうにない。

それなら、とはやては本棚に手をつけたまま車椅子から立ち上がった。

歩く事こそ出来ないものの、ただ立つだけなら可能なのだ。

幸いな事に、この状態ならば目的の本にまで手は届きそうだ。

だが、ここでほっとしてしまったせいか、本棚をつかんでいた手がすべり、本棚から手を離してしまった。

がくん、と体が傾き立て直せないほどに体勢が崩れる。

直後、車椅子から体が投げ出された。

（しまっ　　）

これはまずかった。

このままでは重力に引つ張られ、床に盛大に叩きつけられるであろう。床は固そうな材質で出来ており、まともにぶち当たった場合の衝撃は相当なものだろう。

そんな直後に来るであろう衝撃を思い、はやては思わず目を瞑った。

が。

「　　？」

いつまで経っても衝撃が来ない。

「……あの、大丈夫ですか？」

すぐ下から、まだ声変わり前のおそらくは自分と同程度ぐらいの高い声が聞こえた。

おそるおそる目を開ける。

そこには、先ほど見かけた赤毛の少年がいた。

「ふえ？」

困惑しつつ、冷静になって自分の状況を確認する。

床との距離は50センチほど。仰向けの状態のまま、体は浮いている。その体の胸の辺りには手が、足元の辺りは少年の足によって体が支えられている。

どうやら、少年がクッションのようになる事によって自分を受け止めてくれたらしい。

落ち着いて状況が分かると、はやての口から感謝の言葉が出て来た。

「あ、ありがとうな。君のお陰で助かったで」

「い、いえ。どういたしまして」

少年が照れたように返す。

「で、ですが。その……動かしてもいいですか？ この体勢は結構恥ずかしいですし……」

「あ  
」

少年の言わんとする事が分かり、はやての顔に羞恥の色が浮ぶ。現在進行形で、はやては少年に覆いかぶさるような体勢で浮んでいる。何も知らない人に見られれば少年に襲い掛かっているとも思われかねない状況だった。

「ふえっ！」

赤面しつつもはやては慌てて体を動かした。が、それがよくなかったらしく、再び体勢を崩してしまい少年にのしかかるような状態になってしまう。

近くにいた職員に助けられるまで、そんな騒動が5分ほど続いた。

体勢を立て直した後、改めて自己紹介をしあった。

その時聞いたところによると、少年の名はネギ・スプリングフィールドというらしい。

「へえ、ネギ君はイギリスから来たん？」

「ええ、イギリスのウェールズ地方の方から……」

彼の出身地がイギリスだと知り、はやての顔が綻ぶ。イギリスは、彼の後継人の住む地でもあり、縁が深い。

色々と話してみたいとも思ったが、とりあえずはこの少年が何のために図書館に来ていたのかを聞いてみると、急に思い出したかのように叫んだ。

「え、ああっ！ すみません。この街の、海鳴市の歴史書ってどこにあるか知りませんか？」

「この街の？ それなら、あっちの方にあったと思うんやけど……」

あまり自信のなさそうな口調ではやては答える。

だが、それも無理もないだろう。自分の街の歴史書を調べるような人間などほとんどいない。

それゆえに、図書館に何度も来ているおかげで場所は知っていても一度も閲覧はしていなかったのだ。

だが、幸いなことに記憶通りの場所に海鳴市の歴史書はあった。ありがとうございます、と礼を言うネギにどういたしまして、と柔らかに笑みながら返す。

ネギは、そのうちの一冊を手にとると近くにある椅子に腰掛けた。

ページをめくる。

ネギの本を読む表情は真剣だ。なかなか口を挟みづらい。いや、仮に声をかけても答ええてくれないのではないだろうか。そう思わせるほどに彼は今集中している。

さらにページをめくる。

読む速度はかなり速い。

何か、声をかけようと思ってもこんな真面目そうな表情をされていてはそれを妨げるのも躊躇われた。

さらにページをめくり、わずか15分ほどで、最後のページまでたどりついてしまったらしい。ふう、と小さく息を吐きながらネギは本を閉じた。

そこで、ようやく声をかけようと唇を動かしかけたところ、

ちょうど、それを見計らっていたかのように背後から声がかかった。

「そろそろ時間だよ。次に行かなくていいのか？」

それに対し、慌てたようにネギは壁に付いている時計を見て、続けて声をかけてきた少年の方を見た。

「すみません。今行きます」

黒目黒髪に黒い私服を着た少年だ。背丈は少年と同じくらいに見えるが、ネギに対する話し方を考えるとあるいはもう少し年上なのかもしれない。

そんな事を考えていると、

「ごめんなさい。用事があるのでこの辺で失礼します」

同世代の人間と話す機会の少ないはやては、もう少し話していたい誘惑に襲われたがそれをおさえ、

「あ、いや別にええよ？ 私の方こそ強引に引き留めちゃったみたいで」

そう言った。

それからああ、と思い出したかのようにはやては付け加える。

「私はここに居る事が多いんで、もし見かけたら遠慮なく話しかけてな」

そう言うてにつこりと笑い、ネギも「分かりました」と言ってから去っていった。

ネギと、名前を聞いていなかった黒髪の少年の去っていた方角を幾らか名残惜しそうにはやては眺める。

（同じくらい歳の男の子と話す機会何て珍しいし、もうちょっとお話しておきたかったんやけどなあ。でも初対面の相手を強引に引き留めてもまずいし……）

もし、もう少し彼女がこの少年と話を続けていたら、今後の展開は大きく変わった可能性はあるのだが、それはまた別の話である。

#### 4 話（後書き）

今回出てきた麻帆良と海鳴の位置が同じというのは完全な独自設定です。

これからも独自設定がちらほらと出てくると思いますが、今後よろしく願います。

## 5話

海鳴市市街地上空。

地上から数百メートル離れた位置。

本来であれば、文明の利器もなしにそんな位置に人間がいることなどとはありえない。人間は空を飛べないのだから。

だが、あろうことが、その位置には一人の赤い髪の少女がいた。どこか、西洋人形を連想させる整った顔立ちにウサギのような奇妙な生物のついた赤い帽子に赤い服装が、三つ編みにしたその髪の色とよく似合っていた。その姿には、誰もが頬を緩ませるであろう可愛らしいものだった。

だが、それらの特徴全てを台無しにしてしまうかのようなものが、右手にある。それは、このような幼い少女が持つには明らかに不似合いな巨大な木槌だ。

「……………」

少女の頬に、冬の到来をつげるかのような冷たい空気があたる。だが、少女はそのようなものなどまるで気にしないかのように目を瞑ったままだ。

いつまでも、その沈黙が続くかに思えたその時、背後から不意に声をかけられた。

「どうだ、ヴィータ。見つかりそうか？」

野太い声の主は、服をいっさい纏わず青い見事な毛並みのみが体を覆う。鋭い牙と、肉食獣のような鋭い目付きの持ち主だ。

いや、肉食獣のような、という表現は正確ではない。

声の主は実際に、狼そのものの外見をしていたのだから。  
だが、狼であれば本来は喋らない。

当然の話だ。そもそも声帯の構造からして狼は人間とかけ離れているのだから。

だが、この狼はそのようなことは知ったことかと言わんばかりに普通に人語を発した。

それに対し、少女　ヴィータはごく自然に対応する。

「いるような、いないような……」

視線は狼の方へと向けないまま、ヴィータは続ける。

「こないだっから時々出て来る、みょーに巨大な魔力反応。アイツが捕まれば見つければ一気に20ページくらいはいきそうなんだけどな」

「分かれて探そう。闇の書は預ける」

傍から聞けば、意味の分からない問答だ。

だが、彼女達の間ではしっかりと会話が成立している。

「おーけー、ザフィーラ。アンタもしっかり探してくれよ」

「心得ている」

ヴィータの言葉に、狼　ザフィーラは頷きかけたが、

「　　む、待て」

「……何だよ」

勢いよく飛びかけたのを邪魔された形になったヴィータは、やや不機嫌そうな口調で聞き返す。

「……………」

「おい、話しかけて黙り込むなよ！」

「……いや、言葉ではうまく言い表せないのだが、何か奇妙な感覚が先ほどからしてな。第六感とでもいうやつかもしれん」

「……何だよそれ」

若干、呆れたようにヴィータが聞き返す。  
だが、ザフィーラは至極、真面目な口調のまま話し続ける。

「とにかく、気をつける。今回の蒐集　ただではすまんかもしれん」

「はっ、上等だよ」

何を今更、といった様子でヴィータは自身の愛機グラーフアイゼンを抱える。

「もともとあたしらはリスクを犯している。今更、どんな障害が出ようと気にしないし、どんな障害で出てこようと　ぶっ叩くだけだ！」

J a w o h l

ヴィータの強い言葉に、アイゼンも答える。  
その様子を見て、ザフィーラも静かに続けた。

「そうか。ならばもう何も言うまい。……だが、気をつけろよ」

「ふん、言われるまでもねー！」

その言葉と共に、ヴィータは今度こそ飛び立ち、探索を再開した。  
しばしの沈黙の後、ザフィーラもその場から飛び立ち、夜の上空  
は再び沈黙が支配する空間となった。

ほぼ、同時刻。

日本にある海鳴市の藤見町という町に高町邸はあった。

近くにあるバニングス邸や月村邸といった豪邸には及ばないものの、標準からすれば十分に立派な部類に入る邸宅である。

その一室にて、一人の少女が机に向かっていた。

頭の両脇に、結った栗色の髪。整っている、というわけではない  
が見るものに愛らしさを与える顔立ち。

名を高町なのはといい、この高町家の三人兄妹の末っ子だった。

トントン、と一定のリズムで進むペン。

それ以外に部屋に響く音はなく、まるで美術館のように静粛な空間が作り出されていた。

だが、その手が不意に止まった。

「レイジングハート、今何時？」

ノートからは目を離離さないままに、傍らにある紅く丸い宝石に聞いた。

本来、宝石は喋ることはできない。

I t   i s   8 : 1 5   p . m .   n o w .   M a s t e r

だが、その宝石はきちんとときちんと言葉を発した。

それもそのはずである。この宝石はただの宝石ではない。

レイジングハートと呼ばれる魔法文明の産物・インテリジェントデバイスである。

では、何故高町なのはがそんな物を持ち歩いているのかというと、事の発端は半年以上前に遡る。

本来、高町なのはは、魔法とは無縁な少女だった。

それどころか、魔法の存在すら知らなかった。いや、正確にいえば知ってはいたが、それは空想の世界の産物だと思っていた。

にも関わらず、存在自体が奇跡ともいえる天賦の才を持ち合わせていた。持ち合わせていたが故に、事件に巻き込まれた。

遺跡発掘を生業とする一族の少年、ユーノ・スクライア。彼が発見した、ロストロギア古代遺産・ジュエルシード。

それが、全てのはじまりだった。

そのジュエルシードが不慮の事故によりこの世界、第97外世界、

通称”地球”に散らばってしまったのだ。

それに責任を感じたユーノは、この世界に乗り込んだ。腕には多少覚えがあった。実際に、ユーノの力量は高く、9歳で魔導師ランクは総合A。

なのはのよういきなりAA A相当のような例外中の例外を除けば、十分に一流といえるだけの力量だった。だが、その実力を持つとしてもジュエルシード集めは順調に進まず、ろくに休息をとらずに戦い続けてきたことによる疲れもあり、暴走体を相手に窮地に陥ってしまった。

その窮地を救ったのが、なのはだった。

ユーノを助けるため、インテリジェントデバイス、レイジングハートを受け取って魔導師としての力に目覚めた。

その後、金髪の魔導師、フェイト・テストロッサとの出会いと戦闘。そしてジュエルシード事件。またの名を、「プレシア・テストロッサP・T事件」と呼ばれる大事件の解決に大きく貢献した。

それは数ヶ月前まで魔法の存在すら知らなかった少女とは思えぬほど活躍であり、それだけの活躍ができる実力を短期間で身につけたことを意味する。無論、才能に恵まれていたことは大きい。しかし、その上に胡坐をかくことなく努力を積み重ねたことによってそれだけの実力を得たのだ。

本来、そんな高ランクの魔導師を管理外世界に置いておくことなどできない。

しかし、アースラ艦長であるリンディ・ハラウンなどの計らいによって今は「普通の小学生」としての生活を送れている。

だが、その間もなのはは鍛錬を欠かさず、実力は少しずつ、しかし順調に上がっていた。

魔法の師であるユーノは今この場にはいない。

暫く前に、フェイトの裁判に証人として呼ばれたため、この世界を離れていたのだ。

だが、もう一人の師と呼べる存在・レイジングハートはまだこの場に残っていたのだ。

I t i s b e d t i m e n o w

「……うん。そうだね。レイジングハート」

高町なのはの朝は4時30分とかなり早い。そのため、就寝時間も自然と早くなり、基本的には8時30分頃にはベッドで横になる。自分の愛機になのはは微笑みで返したが、

「っ！」

次の瞬間、表情が途端に変わった。何ともいえない違和感が全身を襲ったのだ。

数ヶ月前ならばこの感覚が何なのか分からなかっただろう。だが、魔導師としての経験がある程度積んだ今のなのはにはそれが何なのかはつきりと分かった。

「結界!？」

アースラ内部。

つい先程、アースラは第97管理外世界「地球」に到着した。

それは当然の事だ。当初からの予定通りであり、何も問題はなかった。

問題はここからだ。

P T事件の民間協力者であり、大きな功績のあった魔導師の少女・高町なのはに連絡が繋がらなかった。

これだけならば問題はなかったが、時間が経つにつれて序々に深刻な事態である事が分かってきた。

海鳴市に、魔力のある者のみを閉じ込める広域結界が出来ている。97管理外世界には魔法技術がない事になっており、当然の事ながらありえない事態だ。

「一体、どうなっているの……？」

執務官補佐であり、通信主任でもあるエイミィは困惑した表情を浮かべている。

艦長であるリンディヤ、その他のメンバーも同様だ。

「艦長……どうやら、海鳴市内に巨大な結界が作られている様子です」

「結界……？」

リンディが驚きに、大きく目を見開く。

魔法技術のないこの世界において、そんなものは本来ならばあるはずがない。そんな結果が日本の町中で堂々と展開されるなど、本来ならばあり得ない自体だ。

「それも、ミッド式の術式ではありません。どこ魔法でしょう、これ……」

困惑の声を尻目に、リンディは素早く頭を回転させた。

結界は相当に強力らしく、解析に時間がかかる。時間がかかってしまえば、そこに閉じこめられたと思われる高町なのはの安否が気遣われる。

そうになると、もっとも手っ取り早いのは……、

「やむをえませんか。誰かを結界内に転送して原因を確かめましょう」

「でも一体誰を？」

エイミイが首を傾げた。

今回は、任務や仕事で来ているわけではないため、武装局員などはほとんど連れて来ていない。

現在アースラに乗っているメンバーの大半は魔導師ランクも低く、戦闘経験に乏しい。

こうなってくると、アースラのエース格であるクロノ・ハラオウの不在が何とも痛い。

戦闘経験が豊富であり、魔導師ランクもAAA+であるクロノさ

えいてくれれば迷わず投入できるのだが、ないものねだりしても仕方があるまい。

とはいえ、この場にいるメンバーは経験も乏しく戦闘能力が高いとはいえないメンバーばかりでどうにかしなければとリンディが考えている時――不意に、一人の少女の声が聞こえた。

「艦長。私が行きます」

「フェイトさん……」

発言の主は、囑託魔導師になったばかりのフェイト・テストロツサだ。

「あたしも行くよ」

続いての発言は、彼女の使い魔・アルフから。

主が行くと言っているのだ。当然の事ながらも、彼女は従う様子だ。

「僕も行きます」

続いては、ユーノ・スクライア。

彼自身の戦闘能力は低いが、結界や防御などのサポート魔法に関しては一流の域にある魔導師だ。

「貴方達……」

確かに、彼女たちが行ってくればこれ以上ないほど頼もしい。フェイトはこの年ですでに一流の魔導師だし、その使い魔である

アルフも同様だ。ユーノもサポートに関してはこれ以上ないくらいに頼りになる存在だ。

それに、結界の中にいる高町なのはは彼女たちの大切な友人だ。その安否が気遣われているのだろう。

「それじゃあ、この三人で決定って事で、いいですよね？ 艦長」

「……やむをえないわね」

リンディは決断し、転送の準備に取り掛かる。

やがて、ミッドチルダ式の魔法陣が足元に現れ、三人の体が光に包まれた。

後に、「闇の書事件」と呼称される事件の幕が、この瞬間開いた。

## 6話

（こんなので……終わり？）

高町なのはは、目の前に迫ってくる紅い少女を見つめながら唇を噛み締めた。

結界に閉じ込められたかと思うと、いきなり襲い掛かってきた紅い少女。西洋人形のような華奢で小柄な外見とは裏腹に彼女は強く、魔導師として腕に多少の覚えのあったのはに完勝。

今まさにとどめをさされる寸前まで追い詰められていた。

（嫌だ、ユーノ君、クロノ君、フェイトちゃん！）

走馬灯のように、これまで関わってきた人々の顔が思い出される。だが、そんな事情など知らないとはかりに少女は近づき、おそらく彼女のデバイスであろうハンマーを振り上げる。

それを見て思わず目を瞑った。

（ ？ ）

いつまで経っても衝撃が来ないことを怪訝に思いながら目を開けると、

「 ！ 」

そこにいたのは半年前に出会い、そして友達になった金の少女が紅い少女の攻撃を受け止めていた。

驚愕に目を見開くのはの肩に手が置かれる。

「ごめんなのは……遅くなった」

数ヶ月前まで聞きなれた声。

「ユーノ、君」

しばらく離れたからといって忘れるはずもない声、そしてその姿なのはの友人、ユーノ・スクライアがそこにいた。

「仲間……か？」

そんな感慨にふける間もなく、紅い少女が睨みながら問いかける。その問いに、フェイト・テストロッサは何の淀みもなく厳かな声で、言った。

「友達だ」

そして、凜とした声で続ける。

「民間人への魔法攻撃　軽犯罪ではすまない罪だ」

「……何だてめえ、管理局の魔導師か？」

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。同意するなら、武装を解除して」

「誰がするかよ！」

叫ぶと同時に、少女は外へと飛び降りた。

何も知らない人間が見たら自殺と勘違いされかねない行動だ。が、しかし少女は空を自由に羽ばたくことのできる空戦魔導師。この程度の高さ、何も問題もない。

「ユーノ、なのはをお願い」

「うん」

ユーノの返事を聞くと、フェイトは俊敏な動きで外へと逃げ出した少女を追っていった。

そんなフェイトを不安そうに見ながら、なのはは近くの少年に話しかけた。

「ユーノ、君」

「うん」

ユーノはなのはを安心させるように微笑むと、緑の光が優しく光った。回復魔法。RPGなどにもよく出てくるポピュラーな魔法だ。だが、RPGなどとは違い、回復魔法をかけたからといって即座に体力が回復するわけではない。

高度な術者がかけた魔法であってもそれなりの時間が必要となる。

だが、それでも少しずつ体が回復してくる感覚はなのはに安心感を与えてくれた。

「フェイトの裁判が終わって……みんなではに連絡をしようと思っただ」

ユーノは回復魔法をかけたまま、口を開いた。

「そうしたら、通信は繋がらないし、局の方で調べたら広域結界が張られてる。だから慌てて僕達が来たんだよ」

「そっか、ごめんね。ありがとう」

なのはは心配をかけてしまった謝罪と、助けてもらった感謝の言葉を口にした。

「あれは誰？ 何でなのはを」

「わかんない……急に襲ってきたから」

「そっか……」

「アークセイバー！」

Arc Saber

フェイトの声と共に、金色の刃が紅い少女を襲った。

「グラーファイゼン！」

少女の声に、デバイスが応じる。

schwalbefliegen

数発の鉄球が少女の前に展開され、少女の魔力光と同じ紅の光に包まれる。それら全てをデバイスで弾き飛ばした。

それと同時に、防御することも怠らずにデバイスに指示を送った。

「障壁っ！」

即座に障壁が展開され、金の刃が受け止められる。

一方、フェイトも少女の放った紅く光る数個の鉄球を凄まじいスピードで交わし切った。だが、全てをかわすのには時間がかかる。

その隙に少女は攻撃に移ろうとするが、

「バリアブレイクっ！」

ここで、フェイトの使い魔・アルフが参戦。

その一撃が少女の障壁に直撃した。

「っのっ」

直後、アルフに向けて少女は攻撃を仕掛けた。

だが、直後に体勢を立て直した主の一撃が背後から来た。

「くっ！」

即座に反攻に転じようとするべく、そちらに攻撃を仕掛けようとする。

と、今度はアルフの方から一撃だ。

高速の攻撃と、アルフによるサポートを受けつつ、フェイトは少女と互いの武器を交え続ける。

フェイトと少女のデバイスが交わる音が海鳴の夜空に響き続けた。時折、アルフからのサポートも入る。それらを相手にしつつも、少女は一步も引かずに戦闘を続けた。

だが二対一とあつては少女に分が悪いようだった。逆に言えば、これまでその劣勢でありながらも少女はよく戦ってきたといえるが。そして、戦いの天秤は遂にフェイト達の方へと傾いた。

「こんのーっ！　　っぐ！」

少女の体を橙色の輪によって止められた。

アルフのバインド　もつともポピュラーな拘束魔法だ。手足にもバインドがかけられ、手足が拘束されてしまい、少女の自由は完全に奪われた。

「くっ……」

く、と悔しげに唇を噛み締める少女にフェイトは告げた。

「終わりだね。名前と出身世界。目的を教えてもらっよ」

「こ、こんのおおーっ！」

が、少女はまだ諦めていないようだった。

かけられたバインドを力ずくで解きにかかる。アルフのバインドは強固だが、少女は強引に解こうと力を込め始める。

だが、フェイトも即座に攻撃できるように構えている。バインドを解いたところで、即座に少女に切りかかるだろう。

この状況で、少女だけで助かる術はない。

そう。少女”だけ”ならば。

「待って！ 何かやばいよフェイト！」

その事に、真っ先に気づいたのはアルフだった。

本能的に”それ”に気づいたアルフはフェイトに警告をとばすが少しばかり遅かったようだ。

「っ！」

直後、フィールドにへと突撃をかけたのは紫の騎士。

瞬間的に、フェイトはその場から離れ、騎士の攻撃からは辛くも回避した。

だが、紅い少女から目を離してしまったのはまずかった。

紅い少女の前に、騎士は悠然と浮び。二人を警戒する。

それと同時に、さらなる闖入者も現れる。

「ぬおおーっっ！」

次に現れたのは、肌黒い肌に、白い髪を持つ獣耳の大男だ。  
その大男の突撃を仕掛けてきたのだ。

そして、その突撃をアルフが受け止めるも　突き飛ばされた。

「アルフ！」

「う、わあっ　！」

大きな衝撃音を残し、アルフが突き飛ばされる。  
ぐい、と大男は手を握りしめたままこちらを睥睨する。

何とかフェイトは隙を着いてアルフの救出に向かおうとするも、  
、

「紫電　一閃！」

それよりも騎士の一撃の方が早かった。

「　っ！」

騎士の剣による一撃。

バルディツシュが咄嗟に防御してくれたが、相手の攻撃の方が一枚上手だったようだ。敵の一撃は防御ごとバルディツシュを押しやり、フェイトの体も派手に突き飛ばした。

騎士は、今突き飛ばした金髪の少女の方角を一瞬だけ見た後、即座に自身の仲間である赤毛の少女騎士へと近づく。

騎士は紅い少女にかけられた拘束魔法を解除し、手足が自由になると、紅い少女は意外そうな顔で騎士と大男の顔を見比べる。

「シグナム、ザフィーラ!？」

「どうした、ヴィータ。油断でもしたか？」

若干ながらからかうような口調で騎士は少女　ヴィータとに話しかけた。

「うつせーよ、シグナム。こっから逆転するところだったんだ」

それに対し、拗ねたような口調でヴィータは返す。

騎士　シグナムはそれに対し、苦笑で応じる。

「そうか。それは邪魔をしたな、すまなかった。だがあまり無茶はするな。我らが主も心配する」

「わあーってるよ、もう」

「それから、落とし物だ」

拗ねるように首を横に向けるヴィータに、シグナムはぽんつ、と赤いものをヴィータの頭に乗せる。

その正体に気づいたヴィータがはつとしたようにそれを見た。

それは、自身の主から貰った帽子。道具に持たせる武器としてではなく、家族への贈り物として貰った大事な帽子。

「破損は直して置いたぞ」

「ありがと……シグナム」

照れたように、視線を合わせぬままヴィータは礼を言う。

そんなヴィータを横目に、シグナムは冷静に戦場を眺める。彼女の視線の中には、ザフィーラと敵の守護獣が激しく抗戦中なのが見えた。

「状況は実質三体三、一対一なら、我らベルカの騎士に……」

「負けはねえっ！」

シグナムの言葉にヴィータが吼えた。

慢心ではない。

自身の力量と経験に対する確かな自信から出た発言だ。

敵の魔導師達が動き出したのを見て、ヴィータとシグナムは再び戦場へと戻った。

「フェイトちゃん、アルフさん……」

フェイトが突き飛ばされた光景を見ていたなのはが悲鳴に近い声をあげる。

「まずい、助けなきゃ……」

隣にいたユーノも、焦りの混じった声をあげる。

「妙なる響き、光となれ。癒しの円をそのうちに。鋼の守りを与えたまえ」

ユーノが呪文を詠唱すると、なのはの周りに緑色の魔法陣が現れた。

「回復と防御の結界魔法、なのはは絶対にここから出ないでね」

現在使用した魔法を冷静に解説すると、念を押すようにユーノは告げると、なのはから離れて飛び立った。

幸い、敵も仲間の拘束を解く事を優先しているためか即座に追撃する様子はない。

フェイトの飛ばされた場所を見つけ、フェイトの元へとユーノは近づく。

「大丈夫？」

ユーノは心配そうにフェイトに問いかける。

先ほど、敵の増援として現れた騎士に吹き飛ばされ、相当なダメージを受けている。無論、バリアジャケットを着ているため致命傷とまではいかないが相当なものだ。

「うん、ありがとう。ユーノ」

「……バルディッシュも」

沈痛な表情でユーノはフェイトの愛機バルディッシュを見やる。

荘厳な雰囲気を漂わせる黄金色をしていたそれが、現在では見るも無惨な姿に成りはてている。

「大丈夫。本体は無事」

R e c o v e r y

バルディッシュは短く答え、己の姿を修復させる。

バルディッシュを確かめるように見てから、フェイトはそう返す。

だが。

状況は極めて不利。

こちらは4人。内一人は戦闘不能状態であり実質的には3人。方や敵は3人。しかも、それ以上の増援の可能性もある。

クロノが不在の現状、こちら側に強力な増援は望めない。低ランクの魔導師を数人投入したところで事態が好転する事もありえない。となれば、やれる事はただ一つだ。

「ユーノ、結界内から全員を連れての転送。いける？」

全員まとめた脱出。

この場における最善はそれだ。それは決して恥ではない。戦力的に逆転が見込めない以上、その判断は間違いなく正解だろう。

ユーノもそれが分かっているためか、静かに頷く。

「うん、アルフが強力してくれれば何とか」

ユーノは暫しの黙考の後、冷静に現状を把握してから結論を出す。それを聞き、フェイトも決断を下す。

「私が前に出るから、その間にやってみてくれる？」

「うん、分かった」

ユーノが答えると、確認するように自身の使い魔へと念話で問いかける。

『アルフもいい？』

『ちよっときついけど……何とかするよ！』

敵の仲間と思しき大男と交戦中のアルフも、やや切羽詰まった様子ではあるがしっかりと返答が来る。

それを確認し、フェイトは改めてユーノに向き合った。

「それじゃ……頑張ろう」

「うん」

ユーノは短く返し、飛び上がる。

フェイトもほぼ同時に飛び立ち、敵のいる方向へと向かう。

状況はこちらが不利。

だが、だからといってここで諦めるという事などありえない。どんな不利な状況であれ、心を決して折る事なく耐え続けなければいずれ必ず勝機は訪れる。

半年前に出会った、二人の共通の友人である少女にそれを教わっていた。

こうして、二人は戦場へと向かった。

車椅子の少女・八神はやたと分かれて以降、町中を適当にうろついてはいたものの、成果はまるで出なかった。

あまり期待できることではなかったが、実際に成果が出ないとなるとやはり気も滅入る。

「まあ、仕方がないよ」

思わず嘆息したネギに、クロノが慰めるように言った。  
やはり、この街に詳しくない自分達では無理があったのだろう。  
誰かこの町に詳しい者と共に改めて調べてみるべきか　と、そこ  
まで考えてクロノの脳裏に一人の少女の姿が浮かぶ。  
半年前の事件で知り合ったこの街に住む少女。彼女ならば、頼め  
ば間違いなく協力してくれるだろう。

「仕方ない、戻るか」

まあ、この日の内に何もかもをしてしまわなければならないとい  
うわけではない。

時間はまだまだあるのだ。

この日はそのまま戻る事にしよう。

そう考え、何ということもなしにビルに目を動かし、

「？」

奇妙な感覚が来た。

どのように、と言われても答えられない。

それは、本能的な第六感ともいえるべきもの。  
理屈から来るものではない。

「どうかしたのか？」

「いや、このビルに少し違和感が……」

「違和感？」

クロノは怪訝な表情を浮かべた後、

「……ちよつと待て」

急に、クロノの顔が真剣なものへと変わる。

無言のままビルへと近づいていく。そして、手元からデバ<sup>S2U</sup>イスを取り出し何らかの操作を行い始め、1分ほど経った後に小さく呟いた。

「やっぱりそうだ」

「どうかしたんですか？」

「このビルには、何らかの認識魔法の処置が施されている」

「ええ！？」

ネギは驚きの声をあげた。

クロノは、顎に手を当てたまま暫し黙考した後、

「急な事ですまないが、少しこのビルを調べさせてくれ」

表情を真剣なものへと変え、ビルの調査へと取りかかった。

ユーノの残してくれた、防御と回復効果のある魔法陣の上で、高町なのはは唇を噛み締めていた。

何も事情を知らない人達にとっては、蛍の光のように見える光景だ。

魔導師達がぶつかり合い、派手な戦いを続けている。

人数の上では同等だ。しかし、戦況は明らかにこちらが不利な状況へとなりつつあった。ユーノもフェイトもアルフも、敵の騎士達に苦戦している。このまま放置していたらこちら側の誰かが脱落するのは必定だろう。

(……何とかしなきゃ)

焦慮の念は募るばかりだ。

そんな中、フェイトが紫の騎士に吹き飛ばされる光景が目に入っ

た。  
「助けなきゃ……」

体は先ほどの戦闘ですでにボロボロ。

一歩歩くだけでも、わずかに体を動かすだけでも全身に激痛が走る。

だが、それでもなのはは歩くのをやめなかった。

「私が皆を、助けなきゃ……」

M a s t e r

不意に、レイジングハートの声が響いた。

S h o o t i n g M o d e , a c c e l e r a t i o n .

急にシューティングモードに変形したレイジングハートを見て、  
なのはは怪訝そうな表情を浮かべる。

「レイジング……ハート？」

L e t ' s s h o o t i t , S t a r l i g h t B r e  
a k e r . (撃ってください スターライトブレイカーを)

その言葉を聞き、愛機の意図を悟った。

そう、確かに自分には、この状況を打破するだけの魔法がある。

スターライトブレイカー+。

なのはの持つ最大の収束型砲撃魔法。

その改良型。本来のスターライトブレイカーにあったデメリッ  
トであるチャージ時間を短縮するのではなく、デメリットを放置し  
て威力をさらに高めたもの。

その結果についた「結界破壊」という効果が付与されている。

これを使い、結界を破壊する。

そうすれば、この状況を打破する事ができるかもしれない。

だが……。

「そんな、無理だよ。そんな状態じゃ！」

I can be shot．（撃てます）

「あんな負担のかかる魔法。レイジングハートが壊れちゃうよ！」

先ほどの赤い少女との戦闘で、レイジングハートは半壊状態。  
即座に修理に出さないと危うい状態だ。

そんな状態でスターライトブレイカーほどの大技を撃ってしまったら、完全に壊れてしまうかもしれない。

だが、そんな主人を安心させるかのようにレイジングハートは告げた。

I believe master．（私はあなたを信じています）

「っ！」

Trust me， my master．（だから、私を信じてください）

その一言で、なのは決めた。

デバイスの信頼に答えられずして何が魔導師か。

「レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ」

展開される桃色の魔法陣。

そして、戦っている皆に念話で告げる。

『フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん。これから私が結界を壊すから！ タイミングを合わせて転送を！』

『なのは……』

『大丈夫なのかい？』

ユーノやアルフから不安そうな声が聞こえてきた。

『大丈夫。スターライトブレイカーで撃ち抜くから！』

そんな声をかき消すかのように、なのはは言った。

「レイジングハート、カウントを！」

C o u n t 9、8、7、5……

スターライトブレイカー

星の光の一撃のカウントダウンが始まった。

カウントは進み、

4、3、2、1……

スターライトブレイカーが今まさに放たれようとした刹那、

「あ」

体に不快感が襲われた。

その、正体は何なのかすぐには分からなかった。

だが、視線をかすかに下げるとようやく”それ”に気づいた。

それは腕。それも、細く、色の白い明かに女性のものと分かる腕だ。その腕が、なのはの力　魔法の源であるリンカーコアを掴んでいる。

「　っ！」

それを理解された、次の瞬間。  
さらに体が締め付けられるかのような感覚に襲われる。

どくん、と心臓が高鳴る。

「あ、ぐ……」

例えようのない不快感が体を支配し、なのはの意識を奪おうとしている。

（駄目……まだ、眠るわけには……）

ここで、眠ってしまうわけにはいかない。  
意識を失う前に　せめて、せめてこれだけは撃っておかなければ。

「スター……ライト、ブレイカー！」

弱々しくなりながらも、かろうじて砲撃魔法を放つ。  
その一撃は、確かに結界を貫き　結界を破壊した。

その光景を見届け……なのはは意識を失った。

「結界が破られた……？」

シグナムが、その事実気づくのになんて時間はかからなかった。まずい。この状況は非常にまずい。

現状ではこちらが優勢。が、結界が破られた以上、すぐにでも管理局から援軍が来るだろう。援軍の数も力量も分からない現状、援軍が来ても勝てるなどという楽観は禁物だ。

シグナムは即座に判断を下す。

『結界が破られた。逃れるぞ！』

『承知！』

他の騎士達の対応も早い。

即座に各自バラバラに、転移魔法を行使し、この場から立ち去った。

「やっぱりおかしい」

建物の中を検分しながら、クロノは呟く。こちらの魔法に関しての知識がほとんどないネギは、その背後で立っているだけだ。周りはすっかり暗くなってしまうっており、街に住む多くの人々は夢の世界へと旅立つ刻限だ。

しかし、クロノは徹夜などにはなれているのかまるで眠そうな様子を見せない。

「しかも、これはミッドチルダ式のものじゃない。おそらくはベルカ式だ」

ビルの壁面に手を逃しながら、クロノは呟くように言った。

「クロノさん、ベルカ式って何ですか？」

「かつて、ミッド式に匹敵する勢力を誇った魔法系統だよ。火力で勝負する事の多いミッド式とは異なり、武器や徒手に直接魔力を注ぎこんでの戦い方が多い」

（要するに、元いた世界で言うミッド式が後衛タイプの魔法使いで、ベルカ式が前衛タイプの魔法剣士といった感じなのかな）

クロノの説明を聞き、ネギはそう思考する。

「……最も、ベルカ式は個人の資質に大きく依存する面があるせいで今は廃れてしまっている。使う者はあまり残っていない」

「でも、全くいないというわけではないんですね？」

ああ、とクロノは頷いた後、話を続ける。

「確かにその通りではある。しかし、ミッドにしろベルカにしても、管理外世界の 日本 の街中でそんな魔法が使われているはずがない。使っているとすれば」

管理世界出身の魔導師がここにいる。

言外にクロノはそう言っていた。

「すまない、少しここで待っていてくれ」

「いや、でも……」

「大丈夫だ、すぐに戻る」

顔を、執務官としてのものへと変えると、クロノは一人でビル of 深部へと入っていった。

奥に入れば入るほど、このビルに仕掛けられた細工のことがわかってくる。

「このビルには認識阻害のもの以外に防衛用の魔法もほとんどかかっていないみたいだ。おそらくは、何らかの隠……」

その言葉は、最後まで言い切る前に遮られた。

近くに浮んだのは、ミッドチルダ式のものとは違う、三角形のベルカ式の魔法陣。

「　　っ！」

クロノが驚愕の表情を浮かべると同時に、そこから一人の女性が現れる。

現れたのは、端正な顔立ちと紫と桃色の中間の髪を持つ、騎士服の女性。

「貴様は……」

こちらに気づいた相手もまた、驚愕の表情を顔に浮かべた。

夜はまだ終わらない。

## 6 話（後書き）

……なかなかクロスオーバーとしての話が進まない。

次回こそは、本格的にクロスオーバーとしての展開になってくるはずです。

## 7話（前書き）

今回は少し長めで投稿してみました。

## 7話

烈火の将・シグナムにとって、その出来事はまさに青天の霹靂だった。

彼女達の目的のため、魔力蒐集に出かけた。そこまでは言い。その途中、管理局の魔導師に捕縛されそうだった仲間・ヴィータを助けた。

ここまではいい。

その際に交戦した管理局の魔導師達との対決中に結界を破壊され、蒐集も中途半端な状態で撤退せざるをえなくなった。

ここまでもまだいい。

だが、逃走に撤退したと思った途端、新たな魔導師と出くわす羽目になるうとは、さしもの彼女も予想していなかった。

相手の方も、驚いたかのように少し間があったが、しばし時間を置いた後、黒い魔導師は警戒するかのように目を細めて聞いた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。少し話を聞かせてもらってもいいか？」

管理局執務官。

予想以上の肩書きに、シグナムはわずかに眉を寄せる。

執務官を名乗った少年は、こちらを警戒したままバリアジャケットを纏った。明らかにこちらを怪しんでいる。

どうする？

民間人を装う 論外だ。

今の自分の服装は、現代日本ではまず見かけないような騎士装束だ。自分で言うのも何だが、日本の町中を歩く格好としてはかなり浮いている。このような格好は仮装パーティーでもない限り、まずお目にかかる事はあるまい。

そもそも、転移魔法を使うところを相手に見られている。この状態で何も知らない一般人を装ったところでまず通用しないだろう。

何も言わずに逃走する 少し迷ったが、これも却下だ。

何故、この執務官がこの場にいたのかは分からないが、もし待ち伏せか何かだった場合、周辺に伏兵が配置されている可能性は十分にある。

第一、この場は他の騎士達との合流地点。自分だけ逃げだしたところで、他の騎士達が捕縛されてしまう可能性も高い。

戦う これが一番無茶に見えるが、これしかあるまい。実力行使でこの場を突破する他生き残るすべはない。

無論、先ほどの魔導師達を含め連戦になる以上苦戦は免れないだろうが。

そうと決めれば、シグナムの決断は早かった。

「ベルカの騎士 ヴォルケンリッターが将・シグナムだ」

名乗った事が意外だったのか、相手は一瞬怪訝そうに目を見開いた。

が、即座にその顔をしきしめ直し、問いかけるよに聞く。

「そのベルカの騎士がどうしてこの管理外世界にいる？」

「悪いが、その質問には答えられない」

レヴァンティン  
愛機を片手に、シグナムは動いた。

「　　っ！」

一閃。

シグナムはレヴァンティンを振るった。

それを、一気に後退する事によってクロノは回避した。しかし、あまりにも急な回避だったせいかバリアジャケットがわずかではあるが破れてしまっていたが。

「　　話をする気はないという事か？」

「申し訳ないが、その余裕もないのだ」

再び押し迫り、レヴァンティンを振るう。

「ステインガーレイ！」

だが、それよりも早くクロノの元から魔力弾が放たれる。

その数が多い。いかに、シグナムといえども全てをさばききる事はできない。

何発かが確実に被弾した。

「ぬっ！」

バリアジャケットが損傷したのを見て、シグナムも顔をしかめる。

予想では、2、3発程度しか当たらないと読んでいた。だが、実際には5発以上は被弾している。

（やはり、先ほどの戦闘でのダメージは思ったよりも大きいのか……）

相手の攻撃が思っていたよりも早かったというのもあるが、それ以上の理由がある。自分の動きが明らかに鈍いのだ。

その原因は明白だ。

先ほどの、金髪の魔導師、フェイト・テストロッサとの戦闘。あれで予想以上にダメージを食らっている。

いや、それだけではない。

ここ数日の無茶な蒐集の数々。

それら、1つ1つがシグナムや他の守護騎士の体力を予想以上に削っていた。それも当然だ。ただ単に蒐集をしていただけではない。最悪の事態になった時、主にできる限り迷惑がかからなうよう、不殺を誓って戦ってきた。

不殺が当たり前の、ミッドチルダ式の魔法と違い、ベルカ式で殺さないように戦うのでは難易度も高い。しかも、休憩時間も十分にとれているとは言い難い。

しかも、主に見つからないようにの行動だ。それだけでも相当に注意深く行動する必要があり、精神的な疲労も相当なものだ。

だが、それでも。

（負けられないのだっ！）

得意とするクロスレンジでの戦いに持ち込むべく、距離をつめる。しかし、剣型のデバイスという得物から、接近戦が得意である事を悟ったのかクロノもある程度距離をとっての戦闘だ。

近づこうとすると、再び魔力弾がシグナムに向かう。  
それらを振り払おうとすると、その間にクロノもある程度距離をとる。

その流れを何度か繰り返している内に、シグナムは自分が劣勢に立たされている事を感じていた。

確かに、目の前の執務官は手ごわいものの自分がここまで劣勢に立たされることなど本来はありえない。

だが、その原因は先に述べたように連戦による疲れというものが大きい。

……それでも、並の魔導師相手ならばそれでも十分だったのだろうが……。

（ぐっ！）

だが。

「ブレイズキャノン！」

この執務官相手では相当な重荷となつてのしかかっている。

轟！ とロングレンジから放たれた魔力砲撃による攻撃だ。

「ぬっ……」

回避できず、砲撃の直撃を受けたシグナムは思わず顔をしかめる。  
受けたダメージは甚大だ。

が、騎士としての矜持が膝をつく事を許さない。抵抗の意思だけは捨てぬまま相手を睨みつける。

（　　まずい）

しかし、戦局はこちらが不利。

致命傷にはなっていないものの、今の一撃で相当なダメージを受けてしまっている。このまま戦闘を続けられれば。

そう考えた、刹那。

「うおらあああっつっ!!」

巨大な鉄槌が下った。

比喻ではなく、文字通りの意味で、だ。

「　　っ!」

その一撃をかわすため、クロノは背後に大きく後退する。

後退したクロノを見て、シグナムは隣に降り立った少女　　ヴィ

ータへと視線を動かす。

「どーした、シグナム。油断でもしたか？」

にやり、とヴィータが口の端をあげながら聞いた。

意趣返のつもりなのか、先ほどのシグナムの台詞そのままだ。当然の事ながらシグナムは、その事に気づいたが素知らぬ顔でヴィー

タに返す。

「ここから逆転するところだったのだ。……それで、ヴィータだけでなくシャルとザフィーラもいるのか」

「……ええ」

「……ああ」

ヴィータの背後に、妙齡の女性      シャマルと、青い狼      ザフイーラが現れる。

近づいた二人に対し、シグナムが視線を動かす。

「シグナム、これは一体どういう状況だ？」

怪訝そうな声でザフィーラが問う。

「どうやら、今日の私たちはとことんツキに見放されているらしい」

自嘲気味にシグナムは呟く。

驚いた事に、ザフィーラはそれだけでおおよその事を察したらしい。そこはさすがに長年の付き合いということか。

「……まだ魔導師がいたのか」

「ああ、今日の我々はどれほどの不運なのだろうな。……ん？」

そこで、シグナムは先ほどから黒髪の執務官の目がある1点を見つめている事に気づいた。

「？」

シグナムは一瞬、怪訝に思うが、視線の先がシャル。厳密に言えば、シャルの持つ一冊の本である事に気づく。

「それは……」

一瞬の間を置いてから、クロノは続ける。

「第一級指定遺失物、ロストログ・闇の書……」

「闇の書の事を知っているのか？」

シグナムは、顔をかすかにしかめる。

だが、シグナムが違和感を感じたのは闇の書の事を執務官が知っていたからではない。

その言葉で、執務官の雰囲気さがらりと変わったような気がしたからだ。

もしかしたら、何か闇の書の因縁でもあるのか？

だが、目の前の執務官の顔にシグナムは覚えはない。

さすがに、目の前の執務官の年齢から考えて直接の被害者という事は考えにくい。被害者遺族という可能性は十分にありえる。

……だとしたら、だとしても自分達は止まるわけにはいかない。全てが片付いたのならば、潔く裁きを受け入れても良いが、今は駄目だ。

こんなところで捕まるわけにはいかないのだ。

レヴァンティンをシグナムは握り直し、口元をしきしめる。

「改めて聞こう。管理外世界において魔導師が　それも、その口ストロギア・闇の書を持って何をしていた？」

この執務官は感情の切り替えも早いらしい。一瞬見せた感情のこもった表情はすでにひっこんでおり、法と秩序の執行者・執務官としての顔に戻っている。

ますます油断できない相手のようだ。シグナムは相手をしっかりと見据えたまま言葉を続ける。

「悪いが、それはできない。黙って我々をこの場から見逃してもらえればそれが最善なのだが」

「……それに同意すると思っているのか？」

「思わないな」

その一言で十分。  
とばかりに、

「鋼の軛！」

それは、まさに獣の雄叫びに近かった。  
ザフィーラの言葉と共に、巨大な棘が執務官の足元へと迫る。

「　　っ！」

背後に跳躍する事によって執務官はかわす。

「グラーフアイゼン！」

同時に、ヴィータも突撃をかけた。

後ろに下がった執務官へと、グラーフアイゼンの一撃が直撃する。

「っ！」

顔に苦しげな色を浮かべながらも、水色の魔法陣を浮かべ、ヴィータの一撃を受け止めていた。

「……シグナム」

戦闘を続ける3人を横目に、シャマルがシグナムに声を掛ける。

「クラールヴィント、お願い」

シャマルの愛機が光り、シグナムの体の傷が癒されていく。

「ああ、すまん」

湖の騎士・シャマルと風のリング・クラールヴィント、癒やしと補助が本領だ。直接的な攻撃魔法こそ少ないものの、こういった形のサポートこそが彼女の持ち味だ。

少しずつシグナムの体に負ったダメージが回復していく中も、執務官と守護騎士2人の戦闘は続いていた。

先ほど、シグナムの体力や魔力が予想以上に消耗していると記したように、当然の事ながらヴィータやザフィーラにも同じ事が言える。

白い砲撃魔導師や結界魔導師、そして使い魔らしき相手との戦闘によるヴィータやザフィーラの体力や魔力も少なからず消耗している。

決して余裕がある状態ではない。

それに対し、クロノの体調はほぼ万全。シグナムとの戦闘があったとはいえ、体力も魔力も満タンの状態だ。

……だが。

いかに、クロノが優秀であっても、シグナム達の魔力が少なく疲労も蓄積しているといっても、さすがに熟練の騎士4人　とはいってもシグナムとシャマルは戦闘に加わっていないがそれでも2人を相手に1人では荷が重すぎた。

「ぶっ飛び！」

ハンマーフォームのグラーファイゼンが唸りをあげる。

ぶん、と鋭いスイングがクロノを襲い、さらには背後からは対象に突き刺し、動きを止めるなどといった効果のある鋼の軛を中心としたザフィーラからの後方支援だ。

「くっ！」

たまらずヴィータから距離をとろうとすると、今度はヴィータが鉄球のような魔力弾を取り出し、それをハンマーフォームのグラーファイゼンでうち飛ばす。  
シュワルベフリーゲン。

飛翔・誘導制御・バリア貫通・着弾時炸裂といった様々な効果を付与してハンマーヘッドで打ち出す非常に汎用性の高いヴィータの魔法だ。

本来、ベルカの騎士にとって射撃や砲撃といった攻撃は不得意とされる。だが、ヴィータはベルカの騎士でありながらもこういった類の攻撃を苦手としなかった。

そして、ザフィーラが前衛、ヴィータが後衛という配置へと変わり今度はザフィーラが牙や爪を中心とした接近戦を展開する。

ザフィーラから距離を取ると、今度はヴィータが前衛、ザフィーラが後衛といったぐあいに巧みに変わる。

さすがは長年、共に戦ってきた守護騎士同士だ。シグナムの目から見ても実に見事な連携を見せていた。

やがて、ヴィータの一撃がクロノを捉える。

「もらった！」

「ぐほっ」

ぐん、と野球で言うアベレージヒッターのスイングのように、パワーよりもコントロールを優先した鋭い一撃が炸裂した。

クロノの体は大きく吹き飛ばされ、向かい側にあるビルへと叩きつけられた。

これは勝負あったな、と内心でシグナムは思った。

そのクロノ相手にゆっくりと、ヴィータは近づく。

何も事情を知らない人間ならば可愛らしい少女が近づいているだ

けだが、ヴィータの実力を知る人間からすれば、魂を奪う悪魔のごとく恐ろしいはずの場面だ。

しかし、クロノは心を折る様子もなくなおも鋭い視線でヴィータや守護騎士達を睥睨している。

その姿は、クロノは知る由もないことだろうが、ヴィータが倒してきたばかりの砲撃魔導師の少女を彷彿させる姿だ。

「悪いな。仇を取らせてやれなかった」

先ほどの短いやり取りで、ヴィータも目の前の執務官が闇の書と何らかの因縁が　おそらくは被害者の親族か何かだろうと予想をつけていた　ある事を悟っていた。

それゆえの発言だ。

普段からは信じられないほどの落ち着いた、感情のない顔でそう言うとそのままグラーファイゼンを振り下ろし　、

きれなかった。

「　なっ！」

驚愕の声を発したのは誰だったか。

”それ”に気づいたヴィータは急遽、背後へと大きく下がる。

そして、ヴィータの小柄な体躯のあった場所に”それ”は直撃した。

「　っ！」

空から天災のように降ってきたのは、大量の光の矢。

見たことがないような攻撃ではあったが、それが、魔力の込められたものだけはシグナム達にもすぐに分かった。

（新手　？）

シグナムが驚いた次の瞬間に、クロノの前に小さな人影が現れる。

（まだ魔導師がいたのか　？）

シグナムの内心では、今日で何度目になるか分からない驚愕の味を味わった。だが、今回の驚愕の内容は2つある。

1つ目は、無論ほかに魔導師がいたのかという驚き。魔法文明がないはずの管理外世界で確認できるだけで主や自分達を含めて11人　正直ただ失笑しか出てこない。

2つ目は、いかに戦いに集中していたとはいえ介入される直前まで気配に気づけなかったこと。

（彼もまた油断できる相手ではないな）

油断も慢心も振り払い、戦いに介入した少年をシグナムは見据えた。

「……なんだよ、テメエ」

もつとも早くに立ち直ったらしい少女が、警戒するようにギロりと睨む。

だが、今はその少女の事はとりあえず後回しでクロノの方へと近づいていく。

「あ、あの。大丈夫ですか？」

「君か……」

顔をしかめながらも、クロノは立ち上がる。だが、力が思うように入らなかったのかやや体が崩れ、片膝をついた。

「……」

慌ててそれを支え、続いてほとんど一瞬で呪文を詠唱する。  
柔らかな光がクロノをつつみ、さきほどまでついていた傷が少しずつではあるが癒えていく。

「僕は回復系の魔法はあまり得意ではありません。けど、少しは効果があるはずですから。そのまま休んでいてください」

「これが、君たちの世界の魔法か……」

見慣れない形式の魔法に、少しクロノは驚いた様子だったがすぐに騎士達の方に向き

直る。

「わざわざすまない。だが、ここでいつまでも休んでいるわけにはいかないんだ」

その言葉に、騎士達の表情も変わる。

武器を構え直してこちらを強く見つめ返す。

「彼女達を　止めないと」

「く、クロノさん、まだ動いちゃ駄目ですよ！」

起き上がろうとしたクロノを慌てて止める。治癒はそれほど進んでおらず、彼の体はまだ万全とはほど遠い状態なのだ。

「僕は執務官だ。執務官には、捜査権や逮捕権のような多くの権限が与えられている。それはそれだけの義務を同時に背負うこともあるんだ。ここでその職務を放り出すわけにはいかない」

それに、とクロノは言葉を続ける。

「彼女たちの目的が分からない以上、放置しておく事はできない。あれは、彼女たちの持つているのは闇の書というロストログア。放置すれば最悪の場合、何万、何億という人が犠牲になるかもしれない危険なものなんだ。最悪の場合、この街の人達が、いやこの国やこの世界の人達が犠牲になるかもしれないんだ」

そう力強く言い切り、騎士達を見据えた。

「  
」

その言葉に、思わず目を見開く。

彼は立派だ。

執務官としてだけでなく、人間としても彼は間違いなく尊敬に値する人物だ。

だが、このまま戦ったところで不利なのは目に見えている。

……となれば、やむをえまい。

「わかりました」

騎士達の方に向き直ると、気を落ち着けるように小さくすつつ、息をすってから、騎士達の方を見据える。

雰囲気が変わった事を察したのか、騎士達の表情も険しくなる。

「彼女達は、僕が止めますから」

カントゥス・ベラークス

戦いの歌を唱えて身体能力を向上させて拳を握った。

それを見て、騎士達も臨戦大勢に入る。

「な！？　しかしつ　！」

その言葉に驚き、何か反論しかけたクロノを手で制する。

……正直な事を言えば。

元の世界への帰還。これが至上の目的だ。

そのためには、文字通りの意味で別世界の事などいっさい無干渉を徹するべきなのかもしれない。

他所の世界の揉め事に首を突っ込まない方がいいのかもしれない。

しかし、クロノはこの世界で色々世話になった相手だ。その彼を見捨てて傍観するなどとてもできそうになかった。

恩人ぐらい守れずして何が立派な魔法使いか。マキステルマキ

「今度はお前が相手をするというのか？」

リーダー格と思われる桃と紫の中間のような髪型の騎士が聞いた。その騎士に、無理と知りつつも問いかけるように聞いた。

「……戦わないですむ事はできないんですか？」

「悪いが、それはできん。力ずくでも通さねばならない目的があるからな」

「そうですか」

その言葉に、一瞬悲しげな色を瞳に浮かべるがすぐに打ち消す。騎士の言葉に、麻帆良に赴任したばかりの頃ならば、納得せずに話し合いで何とかしようと交渉を続けていたかもしれない。

だが、修学旅行や学園祭、魔法世界で超やフェイト 無論、こちらの世界で会ったばかりの金髪の少女の方ではない といった敵と戦っていくうちに分かった。

分かってしまった。

目の前の騎士のような目をした相手に話し合いは不可能だ。信念という名の、鎧で心を閉ざしている相手にそのようなものは通用しない。

それでも、話し合いのテーブルにつきたいというのであれば、相応の実力がある事を相手に見せる必要がある。

口先だけで平和を唱える、無力の者など交渉する権利すら与えられない。

まずは全力でぶつかり合う必要がある、と。

「ヴォルケンリッターが将・シグナムだ」

騎士が、悠然と構えたまま答える。

「鉄槌の騎士・ヴィータ」

「湖の騎士・シャマルです」

「……盾の守護獣・ザフィーラだ」

意外な事に、他の騎士達もそれに続けるように答える。

いや、このような事をしているが本来の彼らは正々堂々とした戦いを好むのかもしれない。

だとしても、このように名乗られては彼の性格上返さないわけにはいかない。

「ネギ、ネギ・スプリングフィールドです」

こちらが返した事に、リーダー格の騎士・シグナムは満足そうに頷くと、

「そうか。本来ならば、4対1、などという卑劣な真似をしたくないが我らとしても、万が一にも捕まるわけにはいかんだ。許してくれ」

その言葉を吐き出すと共に、シグナムの顔に苦渋の色が濃く浮かぶ。

それだけに、本当にこのような真似をしたくないのだという事が

よくわかった。

だが、だとしても、

「紫電一閃！」

黙ってやられるわけにはいかない。

シグナムの魔力がこもって出されたその一撃を、障壁を展開して受け止める。

だが、敵はそれだけではない。

「鋼の輓！」

「シュワルベフリーゲン！」

足元から、巨大な棘が、大量の鉄球がネギを襲った。  
ザフィーラとヴィータからの強力な後方支援だ。全てをかわしきれなかったらしく、かすかに赤い髪の毛が地面に落ちた。

「よそにばかり気をとられていていいのか！」

正面にいるシグナムからも強力な一太刀を振るう。

（っ！）

それにも対応しながらも、内心で1対3という人数差がいかに不利かを感じずにはいられなかった。

多人数対1で戦闘を行う場合、理想とする戦法はそれぞれを分裂させての個別撃破。

人類の歴史を紐解いても、人数で圧倒する大軍を相手に勝利する戦いなどいくらでも存在する。

だが、それらの戦いにしても真正面から全軍同士で激突しながらも大軍を撃破したケースとなればほとんど例がない。

戦いは数が大事。これは世界が違ってもこれは変わらない。

故に、まずは4人と同時に相対している状況を崩す必要があるのだが、

（なかなか隙を、見せてくれないな）

魔力の籠った拳を相手にうちけながらもネギは思考する。

騎士を名乗るだけの事はある、相当な力量を持つ相手だ。ムンドウス・マギウス魔法世界で出会った強敵・難敵達と比べても決してひけをとらないだろう。

だが、重要なのはそこではなかった。

見慣れないこちらの”魔導師”の戦い方には初見という事もあつてなかなか戦闘パターンを読みきれずにいる。

だが、それは相手も条件は同じだ。

最大の理由なのは人数の差だ。

それだけではなく、相手は息のあった連携を先ほどから見せつけている。

前衛に、シグナム。

後衛に、ヴィータ、ザフィーラといった具合に見事な配置を考えて攻撃に行なっている。

自身の切り札である、マギア・エレベア闇の魔法を使えば、との考えが浮かぶが即座に脳裏で首を横り、その考えを打ち消す。

元々、闇の魔法のリスクは高いし暴走してしまう危険性も十分にある究極技法だ。だが、以前にいた世界であれば、自分に万が一の事があっても止めてくれると、その後を任せられる仲間がいた。友がいた。

しかし、この世界で出会ったばかりの人々にそれと同じ役目を背負わせるのはあまりにも身勝手というものだろう。

懸念は他にもある。

以前の世界とは違い、こちらの世界には以前の世界の”魔法”技術がまるでない。こちらにある魔法は定義からして大きく異なる。管理局や管理世界の技術力の高さは十分に分かっているつもりではあるが未知の技術である”魔法”にどの程度対策をとれるかとなると正直予想がつかない。

「くっ！」

「おらあつつっ！！」

先程までは前衛にシグナム、後衛にヴィータ・ザフィーラといった陣形で交戦していたのだが、いつの間にかヴィータも前衛に加わり、前衛にシグナム・ヴィータ。後衛にザフィーラという陣形に変わっていた。

剣を得物とする相手との戦闘経験は、幸か不幸が多い。ゆえに、シグナムは強敵ではあるが難敵ではなかった。

が、ヴィータのようにハンマーのような鈍器を振り回す相手との戦闘経験はそれほどなく、さらに言えばネギは、自分よりも小柄な相手との戦闘経験がほとんどない。そのような要素からヴィータのような相手の方がはるかに厄介だった。

「ラケーテンフォーム！」

がこん、と音がしてヴィータのデバイスから薬莢のようなものが排出される。それと同時に、彼女のデバイスの形状がこれまで以上に攻撃に特化しているようなものへと変わった。

「ラケーテンハンマー！」

ずしり、と防御用に展開した障壁に衝撃が走る。

攻撃が恐ろしく重く、しかも障壁破壊などに特化しているらしくそのままの勢いで碎け散った。

瞬時にかわそうとしたもの、完全にはかわしきれなかったようだ。わずかではあるがヴィータの一撃はネギの肩をかすめた。

出血はほとんどない。

しかしそれなりにダメージを受けたようであり、肩の周辺には痛みが残る。

一瞬ではあるが、動きも鈍った。

それを隙と考えたのか、今度は別の方角からシグナムが攻撃を仕掛けてくる。

「紫電一閃！」

やや助走をつけてからの、強烈な一撃に即座に対応する事ができない。これはまずい、と思った刹那。

「ブレイズキャノン！」

轟！ と水色の魔力光がシグナムを打ち抜いた。

「ぬおっ！」

水色の魔力光　こちらの世界の魔導師に存在する魔力の色、そして水色の魔力光の持ち主はこの場に一人しかない。

「クロノさん！」

シグナム達への警戒を怠らぬまま、慌てて魔力光の持ち主、クロノ・ハラオウンの方にネギは視線を動かす。

「体はまだ完全に治ってないのに、無茶ですよ！」

「僕は執務官だ。……いや、そういった事とは関係なしに年下が一人で戦っているんだ。いつまでも休んでいるわけにはいかないだろう」

ややつらそうな様子ではあるが、毅然とした様子でクロノは立ち上がった。

一方、苦悶の色を浮かべつつもシグナムは砲撃に耐え抜き、立ち上がった。

「無力化できたと思っていたが、甘かったか……」

「くそっ、カートリッジにも余裕がねえってのに……」

シグナムから驚きの声が、ヴィータの方からは舌打ちするかのよ

うな声がそれぞれ聞こえてくる。

「シグナム！ あたしは執務官の方を！」

返事も聞かずに、ヴィータはそのまま飛び出しクロノの元へと向かった。

「クロノさん！」

ネギが、クロノのサポートに回ろうとするのをシグナムが止めた。

「悪いが、お前の相手は私だ。余所見をしてもらっては困るな」

「っ！」

色々な意味で慣れない相手だったヴィータが離脱してくれたのは僥倖だったものの、未だに2対1と不利な状況だ。

シグナムの攻撃に対応しつつも逆転の手を模索する。

同時に、なぜか一瞬シグナムの動きが止まる。

だが、次の瞬間にはすでに攻撃に戻る。

シグナムのレヴァンティンの降りおろされる前に、瞬動術を用いてシグナムの目前へと移動し、右肘を前へと打ち込んだ。

魔法と中国拳法という、本来は異なる技術同士を組み合わせた技法だ。さしものシグナムも咄嗟に対応できず、シグナムの体が後ろへと後退する。

（ ？ ）

その時、奇妙な違和感をネギは感じていた。

先ほどから、妙だ。あれほど不利な展開であつたにもかかわらずこちらが有利な状況へと戦局は変化している。

単に相手の戦い方にもなれてきたという事か、

（いや、違う）

即座に首をふる。

そして気づいた。違和感の正体に。

（あの青い狼の姿がない）

先ほどから、執拗に背後から後方支援を行なっていたザフィーラの姿がいつの間にか消えている。

一体どこに？

疑問が膨らんでいく中、シグナムが口を開いた。

「見慣れぬ魔法を使うだけでなく、近接戦闘でのこの力量……。正直、先ほどのテストロッサやそちらの執務官に続いてわずか一晩でこれほどの猛者に会えるとは思わなかったぞ」

（テストロッサ？）

その言葉にネギはかすかに首をかしげる。そのような名前を最近どこかで聞いたような……。

「こんな状況でなければ、是非とも引き続き戦いを楽しみたいところなのだが」

しかし、とシグナムは唇を動かす。

「この場はそうはいかん。我々には為せばならぬことがある故に」

その後の動きは素早かった。

シグナムが、不意に大きく背後へと跳躍した。

そこにあつたのは、緑色の魔法陣。その上には先ほどから姿が見えなくなっていた3人　ザフィーラとシマルの姿もあつた。

同時に。

クロノとの戦線を離脱したらしいヴィータまで合流してしまっている。

（しまった！　さっきから妙な動きをしていたのは、この位置に移動するため　）

シグナムの先ほどの奇妙な行動の意図が分かったものの、時すでに遅かった。

おそらくは、先ほどから全く参戦の様子を見せていなかったであろうシャマルが作つたと思われる魔法陣はさらに濃い緑色に輝く。

元々、シグナム達の勝利条件は勝負に勝つことではない。撤退に成功する事だ。目の前の魔法陣が輝き、騎士達の体を包んでいく。

「この場は引かせてもらう。　ではな」

「くそっ！　待て！」

肩を抑えながらも、クロノが必死に叫んだ。

だが、古今東西待てと言われて待つような犯罪者はいないし、そ

んな事はクロノだって承知しているだろうが、つい言わずにはいれなかった。

そして、4人の騎士達も「大半の者」に含まれる。

聞く耳を持たず、この場から騎士達は離脱した。

十分なバックアップがない以上、今の状態で追跡を行うのは相当な危険を伴う以上ここでの深追いは無謀なだけだ。

ネギとしても、負傷しているクロノを置いて追跡には移れなかった。

「……」

この場に、沈黙が訪れる。

それは、騎士達が完全にこの場から離脱した事を意味していた。

## 8話

時空管理局本局。

時空管理局の本部であり、内部は訓練施設やら司令部だけでなく食堂や娯楽施設など多くの施設が収容されており、一種の巨大都市といってもいい場所だ。

老若男女問わず、多くの人々が行き交うその様子はまさに壮観とあっていい。外観はまるで宇宙要塞のようにも見え、まさに法と秩序を守る拠点に相応しい地だ。

その中にある一室。

ネギと今、向かい合うように座っている相手はリンディ・ハラオウン提督だ。あの騎士達が逃走した後、救助に来た管理局員によっていったんこの部屋にまで案内をされた。

さきほどの戦闘で受けた怪我は、大したものではなかったらしく軽く絆創膏を貼った程度ですんでいる。

別室で、クロノも手当てを受けてはいるがこちらも大した怪我ではないらしい。

その事をまず告げられ、ひとまずネギは安堵した。

ここで、リンディはあるロストログアについての説明をしてくれた。

闇の書。

魔力をひたすら蒐集し、一定の魔力が集まると同時に持ち主に膨大な力を与えると呼ばれるロストログア。

活動期間はかなり長いものの、その詳細についてはほとんど分かっていないらしいが、それによってこれまでおき続けた被害は甚大

であり、何の比喻もなしに世界そのものの命を奪い続けてきた魔導の書。

滅んでもなお主を変えて無限の転生を続ける。

そして、そしてその蒐集を実行し、主を守護するのが守護騎士と呼ばれる騎士であり、彼女たちもまた闇の書と共に転生を繰り返す存在。

これまで、感情らしいものを見せたという情報のない彼女達がなぜ今回は自分達の意味とも呼べるものを見せてきたのかは分からない。

だが、彼女たちの言葉からもおそらくは今回の行為はその蒐集活動だったのだろう。

……以上が、推測も混じっていると前置きしつつも説明された内容だった。

「闇の書 守護騎士、そんな存在が……」

「おそらく、彼女達の目的は闇の書完成のための魔力蒐集、それに貴方達はそれに巻き込まれてしまったと思うんだけど」

少しばかりに考え込むような様子で、リンディは続ける。

「ごめんなさいね。せっかく地球にまで行ったのにたった一日でここに帰ってくる事になってしまつて」

「いえ、こんな事態になつてしまつたわけですし、仕方がないですよ」

あの状況ではいったんこちらに戻るしかなかった。  
それに、あの世界で元の世界に帰るための手掛かりらしいものは

ほとんど見つからなかった。

あれ以上調査を続けていてもあまり意味がなかったかもしれない。

ふと、リンディは思いついたように立ち上がると部屋に置かれて  
いるポットをとると、そのポットからカップに紅い液体　おそら  
くは紅茶だろう　を注ぎ、テーブルの上に紅茶の注がれたカップ  
を2つ置いた。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

素直にそれを受け取り、口元へと運ぶ。

……美味しい。

ネギは英国人であり、英国人らしく紅茶好きだ。数少ない趣味で  
もある。

その彼からしても十分に満足できる味だった。

一方のリンディの方も、リンディは紅茶にミルクを注ぎ……砂糖  
を入れ、砂糖を入れ、砂糖を入れ、砂糖を入れ、砂糖を入れた。

（……って、ええっ！？）

目の前の光景に思わずネギは目を見張り、思わず絶句した。

見た限りでは、5本ものスティックシュガーが消費されている。

カップの中は、共に入れられた大量のミルクも混ざり、紅茶という  
よりも白茶と呼ぶに相応しい色へと変色していた。

しかも、「まだ甘さが足りないかしら？」などつつばやいている。

色々で見なかったこと、聞かなかった事にしたい光景だった。

「あら？　どうかしたのかしら」

そう言つて紅茶を　いや、違う。頭の中で首を横に振り必死に目の前の「コレ」を紅茶である事を否定する。

目の前の「コレ」はかつて紅茶だったものの残骸だ。断じて紅茶なのではない。

紅茶を愛する英国人として、「コレ」は必死に紅茶ではないと自分に言い聞かせる。

とにかく、リンディ提督は紅茶と称する液体の入ったカップを口に運び美味しそうに飲み込んでいた。

……頼みますから美味しそうに飲まないでください。

色々と懇願するように見つめるが、リンディは幸せそうな表情のまま紅茶を飲んでいる。

「あの、それは……」

「ああ、そのまま飲むと苦いからこうやって薄めているの」

「う、薄め……」

……薄めるほど苦くはないと思うのだが。

愕然とするネギの前に、リンディは平然とお茶を飲み続ける。その顔には心の底から幸せそうな表情が浮かんでおり、「冗談ではなくリンディは真面目に言ったのだ」という事がよく分かった。

そんな反応を不思議そうな目で見つめられ、

「前に緑茶に砂糖やミルクをいれた時もなのはさんに似たような反応されたけどそんなに不思議かしら？」

「あ、あの。まさか緑茶でもやっただんですか？」

恐る恐る、といった様子で聞くネギに、リンディは平然と首を縦に降った。

さらに啞然とするネギの前で、リンディは平然とカップを口元へと運ぶ。

ちなみに緑茶に砂糖を入れる風習は、アメリカやシンガポール、台湾などに存在しており決してありえない飲み方ではない。

もっとも、一般的な日本人の感覚からすればかなり外れている事も事実であり日本人である高町なのはからは啞然とされてしまったのだが。

日本での暮らしもそれなりに長かったネギからしても容易に受け入れられるものではなかった。

「えっと、なのはさんという方はもしかして日本の方ですか？」

話題逸らした。

とりあえず、これ以上この話はやめよう。

本能的にそう思ったネギは話題をやや強引にだがそらした。

それに、リンディの会話に日本の人名らしいものが出てきて気になったのも事実ではある。

「ああ、そういえば話していなかったわね。日本人の女の子であな

たと同じくらいの子なんだけど……」

そこまで言うと、リンディはカップを置いた。その中身はすでにない。あれだけ砂糖とミルクの混ざった液体は全て飲み干してしまっただけだ。

「そうね。もう一度地球に行くとしたら、会う可能性も高いです。今のうちに紹介しておきましょう」

リンディはそう言うと、ソファから立ち上がった。

豪華というわけではないが質素でもない、清楚でアットホームな雰囲気を感じさせる海鳴市の住宅街にある住宅。

同じ街にあるバニングス邸や月村邸のように、誰の目も惹きつけ感服させるような豪華な雰囲気は微塵もないが、そこにあるだけで穏やかな気持ちになれる不思議な安心感があった。

その住宅の居間にシグナムとヴィータ。シャマルはいた。先ほど

までのような騎士甲冑は当然の事ながら解除されており普通の私服姿だ。

ちなみに、ザフィーラは現在この家の主と散歩中だ。このような時間に危険ではないかと言う気もするが、ザフィーラの実力を知る3人の守護騎士達は芥子粒ほどの危惧も抱いてない。たとえ不埒な考えを起こすチンピラや、特殊な性癖の持つ性犯罪者の類が襲ってきたところで文字通りの意味で秒殺できるだけの力がザフィーラにはある。

ために、そちらに関しては何ら心配をない。問題なのは、今日の連続して行われた戦闘の事だ。

確かに、客観的に見れば守護騎士達は勝利を収めただろう。魔力の蒐集にも成功し、全員が無事に生還した。

それは事実だ。

だが、致命傷というほどの手傷は追わなかったものの、予想以上の苦戦もしたしカートリッジも大量に消費した。

何よりも今日の一件で確実に管理局の目をつけられたのは間違いないだろう。

今後の蒐集で大きな痛手になる。

「……」

「……」

疲れのためかそれ以外の原因か、ほとんど言葉はない。それほどに今日の戦いは激戦だった。

だが、しばらくの沈黙の後シグナムが口を動かした。

「カートリッジは？」

「今日の戦いでほとんど使っちゃっているから。元の量に戻すのはかなり時間がかかると思う」

「当分は派手に動かない方がいいというわけか」

シグナムは頷いた後、続ける。

「それで、肝心の蒐集はどのような感じだ？」

「最初にヴィータちゃんが倒した白い子の分で20ページほど……」

「そうか」

正直な事を言えば、これほどの消耗をしたのだ。

いかに逃走する事だけを考えていたとはいえできることならば、他の魔導師からも蒐集するべきだったかもしれないし、そのチャンスもあった。

だが、今更そんな事を悔やんでも仕方がない。  
今後の策を練るべきだろう。

「カートリッジの消耗も予想以上に激しいし、これからは管理局にも本格的に注目されたと見るべきだろう。しばらくおとなしくしておくべきかもしれんな」

「でも、このままじゃはやてが！」

「っ！ 待て！」

声を大きくしかけたヴィータをシグナムが慌ててとどめた。

「どうやら主が帰ってきたようだ。ヴィータ、シャマル。この話はここまでだ」

その言葉に不承不承といった様子でヴィータは頷くと、そのまま腕を組んでソファに座り込んだ。

「そんな顔をするな。主が余計な心配をしたらどうする」

「……わあーってるよ、もう」

不機嫌そうな様子でヴィータが返したのとほぼ同時に、玄関にある扉が開かれる音が聞こえた。

続いて、車椅子を動かす音が聞こえ、それはこの部屋の前で止まった。

がちやり、と居間へと通じる扉が開かれ、一人の少女が入室する。

「ただいまー、みんな」

穏やかそうな声で少女　八神はやては口を動かす。

多くの者は予想すらできまい。幾多もの次元世界を滅ぼした悪魔のとき古代遺産<sup>ロストロギア</sup>、闇の書の現在の主がこのような小さな少女であるとは。

傍らには、忠犬のようにザフィーラが付き添っている。

「はやて、お帰り！」

先ほどまでの不機嫌そうだった表情を一変させ、ヴィータが飛びついた。

「ヴィータ、ただいま。いい子にしまったか？」

「うん！」

笑顔でヴィータは応じ、はやてはその頭を撫でた。ヴィータはそれに気持ちよさそうに目を細めている。

そこには、幾多もの戦場で戦ってきた時の悪鬼のような表情は微塵もない。歳相応の少女の顔がそこにあった。

(……穏やかな日常だ)

シグナムは思う。

長い事生きているが、このように穏やかな日常は一体いついらいだろうか。

だが、いくら記憶を遡っても穏やかな日常などという記憶は出てこない。あるいは、遠い大昔にあったのかもしれないが、少なくともシグナムの思い出せる範疇では出てこなかった。

それだけに、思う。

(守らねばならんな)

闇の書の将として。

主八神はやての騎士として。

……だが。

それと同時に、シグナムの心の中に高ぶっている快感を必死に抑えている自分もいた。

それは、八神はやての騎士としてではない。一人の騎士としての、というよりも戦士としての興味。

（フェイト・テストロッサ）

まず頭に浮かんだのは、最初に交戦した金髪の魔導師。

良い師に学んだのか、よほど才能があつたのか、相当の努力をしてきたのか、あるいはその全てだったのか年齢からは信じられないほどの良い魔導師だった。

重傷とは程遠い。

だが、確かにシグナムは彼女の一撃によってダメージを受けた。

（あのような状況での戦闘でなければ、存分に戦いを楽しみたかったのだがな）

守護騎士の将としての矜持と義務が、バトルマニア戦闘狂としての部分を必死に抑える。

自分は騎士だ。

主の事を第一に考えねばなるまい。主の命に関わる事となれば尚更だ。

彼女だけでなく、その守護獣や結界魔導師も手ごわかった。ただ、あの二人の場合は明らかに後方支援に特化しているように見受けられた。直接剣を交えたわけではないが、あの二人の場合は強敵にはなりえても好敵手にはなれそうにない。

ここでふと、彼女達との戦闘の後の事を思い出す。

黒髪の執務官と赤毛の魔導師との戦闘を。

あちらも相当に手強かった。

あの執務官は「強い」というよりも「巧い」相手だった。圧倒的なパワーやスピードこそなかったものの、巧みな戦い方によって苦戦を強いられた。連夜の連戦によって消耗していた身では、ヴィータの助けがなければ危なかったかもしれない。

それに　もう1人。

（あの少年。ネギ・スプリングフィールドといったか）

赤い髪の毛を纏った、見慣れぬ魔法を使った少年の事をシグナムは思い出す。

全力を出し切っている様子はなかったが、彼もまた、高い力量を持つ事が伺える少年だった。

本来ならば、今回のように数で押し切ったあげくに逃走などという騎士としてあるまじき策は用いたくはなかった。

正直な事を言えば、1対1で真正面から戦ってみたいという気持ちも強い。

彼の使う魔法の魔法陣は、ミッド式とも近代ベルカ式でも、もちろん自分たちの使う古代ベルカ式とも違うように思えた。

長い時を生きる自分達でも見た事がなかったような……

見た事がなかったような……

なかったような……

（……いや、本当にそうだったか？）

遠い昔、似たような魔法を使う相手と戦った……ような気もしないでもない。

だが、昔の事を思い出そうにもその「昔」が10年前の事なのか、数十年、数百年単位での「昔」なのかまるで分からない。思い出せ

そうにない。

それも当然か。

記憶など、自然に上書きされていき古い記憶は次々と薄れる。

そしてそれは、人外が存在であるヴォルケンリッターとて例外ではない。

（どこだったか……）

なかなか思い出せない。

かなり昔の事なのか、あるいはシグナムの勘違いなのかもしれない。

と、そこまで考えてシグナムは慌てて首を左右に振った。

（まあ、いいか。今に優先する事は闇の書の完成。それを忘れるわけにはいかん）

そうだ。

今最優先すべきは、好敵手を見つける事でも私闘を楽しむ事でもない。

闇の書の完成と主の平穏。それが至上目的だ。

その他の事は後回しだ。

シグナムは自分に言い聞かすように考えると、大きく首を左右に振った。

ふと、カレンダーが目に入る。

それは、今年のものではない。来年に備えてと、はやてが早くも用意した来年の年号が記入されたものだ。

（はたして、これを使える日が来るだろうか）

はやての病はかなり深刻だ。蒐集が間に合わなければ最悪、来年の初日の出を拝む事なくこの世を去る事になる。もしそうになったら、そうなってしまったら。

と、そこまで考えて慌てて思考を振り払う。  
何を馬鹿な。

そのためにこれまで活動してきたのだ。  
失敗するなどありえない。あつてはならない。

そう自分に言い聞かせてはやてとヴィータの方を見た。

何やら談笑をしているらしく、その姿はとても闇の書の主とその騎士の姿には見えない。

（これが、平穏というものか）

大事なのは主の身だけではない。  
守らなければならない。

この日常も。平穏という何にも代え難い大事な宝を。

## 0・1話（前書き）

なかなか次の話が投稿できそうにないので、順番を崩して幕間2を先に出す事にしました。

## 0・1話

某月某日第一管理世界ミッドチルダ。

その日は、強い雨の降る豪雨の日だった。雷の音も遠くから聞こえてくる。青い空は、黒い雲によってまるで見えない状況であり、まだ昼間にも関わらず真夜中のように暗い。

その天気は、プレシア・テストロッサの心情を強く表しているかのように暗く、荒れていた。

「違う……」

モニターに映された映像を見て、プレシアはこの世全ての出来事に絶望するかのような呻き声をあげた。

「何もかもが違うッ！」

モニターに映し出されるのは、アリシア・テストロッサ いや、違う。

プレシアは、すでに目の前のモニターに映し出される少女をアリシア・テストロッサだという認識を消していた。

モニターに映し出されるのはただの失敗作。

アリシアの記憶を持ち、アリシアの顔を持つだけの存在。それ以上でもそれ以下でもないただの失敗作だ。

「どうして……」

プレシアは頭を抱えてうずくまる。

……違う。

全然違う。

この少女は何もかもが違う。

利き腕が違う。アリシアは左利きだ。だが目の前の少女は右利きだ。

性格も違う。アリシアは、こんな風に控えめな笑い方はしなかった。

何よりも、アリシアにはほとんど引き継がれる事のなかったプレシアの魔力素質が目の前の少女には十分に引き継がれている。

しかも、魔力光は金。プレシアにとっては全てを失う羽目になった事件を連想させる金色だった。

この娘は自分を嘲笑っているのか。

そんなにも、自分は無能だと。大魔導師などと呼ばれても娘一人蘇らせる事はできないのだと、嘲笑されているようにプレシアは感じた。

……もういい。

コレはもう諦める。

これ以上先は、明確に禁断の領域。禁忌に踏み込む事になる。そうなった場合は手駒が必要だ。

自分の思うように動く手駒が。

そうなるとこのモニターに映る少女は、娘としてはただの失敗作だとしても、手駒としては一級品になる可能性が十分に高い。何せ、アリシアにはいっさい引き継がれる事のなかった自分の高い魔力素質が十分に受け継がれているのだから。

自分を母親ということと慕っているのも大きな利点となる。これを利用すればいい。そうすれば自分の言う事を聞く手駒が出来上がる。

……そのためには。

ここまで考え、プレシアは奇妙な気配に気づいた。

「はじめまして。プレシア・テストロッサ」

不意にかけられた声に、プレシアは慌てて振り向く。

そこにいたのは、黒いローブ姿の男。性別は外見から分からないが仮にそうしておく。であり顔の辺りまで隠されており、顔は見えない。街中をこんな格好でうろついていたら職務質問される事はまず間違いないだろう。

だが、プレシアが慌てたのは男の格好が原因なのではない。何事もないようにこの部屋に立っている。それ自体が異常なのだ。

明確な違法行為は　あくまでこの時点での話だが　行なっていないとはいえ、この研究施設には機密維持のため、厳重な警備用の設備を設置してある。

それらの警備をすりぬけ、この男はこの場所までたどり着いた事になる。

「……貴方は何者かしら？」

極力、平静を装ってプレシアは尋ねる。

少なくともプレシアは目の前の男など知らないし、当然の事ながらこの研究所に招いたわけではない。だが、目の前の男は自分の名前を知っていた。それはつまり、何らかの目的を持ってこの研究所に侵入し、プレシアに接触した事になる。

警戒したまま、プレシアは目の前の男を睥睨する。

プレシアは研究者であって戦士ではない。だが、条件付きとはいえSSランクは伊達ではない。

並の相手であれば、軽く一蹴できるだけの技量がある。

だが、そんなプレシアを前にしても相手は飄々とした様子のまま両手をあげて見せた。余裕綽々といった様子だ。そんな態度がプレシアの癢に障り、眉間に刻まれたしわがいつそう深くなる。

「まあ、そう警戒しないでくれ。私はただ話し合いに来ただけなのだから」

「話し合い……?」

怪訝そうな顔をプレシアは浮かべ、男は構わずに続ける。

「そうだよ。ドクター・プレシア。我々は、大魔導師と呼ばれる貴女の持つ技術者としての力量に、高い興味と感心を持っている」

「……」

プレシアは無言だ。

「だが、その貴女を持ってしても御息女を死神の手から取り戻す事

は出来ないらしい」

「ッ！」

プレシアの表情が険しくなる。自身の研究を擲擧するような物言  
いも頭に来るが、それ以上にこの男は自分も目的を知っている事。  
自分が、何をしようとしているか。

アリシアの蘇生が目的だという事を知っている。

「そこで、だ。ここで提案なのだが」

男は両手を高くあげて続ける。

「我々に協力してくれないか？ そうすれば、その代償として我々  
が貴女の悲願を叶えてあげられる」

「協力？」

「貴女のような人々を我々は求めている。それに、これは貴女にと  
つても得となる提案のはずだが。今回の件が失敗した以上、貴女も  
もはや合法的な手段で願いが叶うとは考えてはいないだろう。貴女は  
どの道、禁断の領域に足を踏み入れるしかないのだ」

確かにその通りだ。そもそも、クローン作成自体がすでにグレー  
ゾーン。違法スレスレの行為。

これ以上となれば明確な犯罪行為に手を染めるしかない。  
そうなる以上、この男の提案に乗るというのも一策だ。

だが。

「即座に頷く事はできないわ」

しかし、それも全ては目の前の男が信頼に足る人間であるという大前提があつてこそ成り立つことだ。

当たり前の話だ。まだ会ったばかりのこの男をいきなり信頼できるはずがない。

それに、だ。

「そもそも貴方が本当にアリシアを蘇らせてくれるだなんて話、悪いけれどとても信じられないわ」

「その点は心配ない。我々に協力していただければ、即座にその証拠をお見せしても良い」

「証拠？」

「それを証明するために、我々の元に一度来て欲しい」

「……ここでは見せられないというの？」

「残念ながら。だが、我々についてきていただければ奇跡を見せてさしあげよう。とびっきりの奇跡を」

男の言葉に、プレシアは考え込む。

もし、この男の言っている事が本当だとしたら願ってもない事だ。それによつて悲願は叶う。

しかし、プレシアは目の前の男を半信半疑、いや9割以上は疑っている。当然のことだ。わけのわからないまま現れて、こんな提案

をしたような男をいきなり信用できるはずがない。

だが、大きな期待をかけていたプロジェクト「F・A・T・E」の失敗によりプレシアの半ば自暴自棄になっており、得体の知らない人間についていくリスクよりもアリシアの蘇生という目的が叶うかもしれないというわずかな望みの方が大きかった。

それに、罠という可能性は低いと考えていた。嚴重な結界や警備の研究所にいとまたやすく忍び込み、さらにはプレシアの背後に立つという離れ業をやつてのけたこの男がわざわざ周りくどいやり方で自分を殺すとは考えにくい。

万が一、これが何らかの罠だったとしてもそうなたらそうなたで構わないとさえ思っていた。もはや自分に失うものなどないのだから。

「分かったわ。とりあえずはその奇跡とやらを見せてちょうだい。話はそれからよ」

でも、と言ってからプレシアは男の方を向いた。

「まずは貴方の、いえ貴方達の組織名について教えてくれないかしら？」

この男は先ほどから、『我々』という言葉を使っている。男単独の提案ではなく、男が何らかの組織の者である事は間違いないだろう。

「ほう、それは我々に興味を持ってくれたと解釈しても良いのかな？」

「違うわ。ただ何となく聞いておくだけ。いつまでも名前が分からないままでも気持ちが悪いだけよ」

そうか、と言いつつ男は大きく両手を広げる。  
そして、宣言するように続けた。

「我らの組織の名は コスモ・エンテレケイア 完全なる世界」

9話(12・24旧10話と統合)(前書き)

旧10話と統合しました。

## 9話（12・24日10話と統合）

自販機や簡素な椅子などが置かれてあり、小休止などを取るにはもってこいの開けたスペース。

ネギは、リンディに連れられて歩いていくとそんな場所に出た。

そこにいたのは、すでに見知った顔ばかりだ。

同年代ほどの少年、ユーノ・スクライアと十台後半ほどに見えるアルフ、そのアルフとほぼ同年代に見える執務官補のエイミ・リミエッタ。

ユーノとアルフはラフな私服姿だ。

「あれ？ 艦長、どうかしたんですか？」

声をかけたのは、この中では唯一制服 おそらく管理局のものを着ているエイミだ。

明るく和かであり、誰とでもすぐに打ち解けられるような雰囲気を持っている。

だが、ネギはなぜかこの人の声を聞くたびになぜかびくりとしてしまっていた。なぜなのか最初のうちは分かっていたが、声を聞いている内に少しずつわかってきた。

……この人の声はマスター師匠に似てるんだ。

脳裏に浮かぶのは、魔法の師であるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

最強の魔法使いを自称する吸血鬼の真祖。  
はつきり言って、目の前の少女とは似ても似つかぬ似つかぬ別人

ではあるのだが、なぜか声は似ているように聞いた。

そういえば、アルフの方は出席番号4番の綾瀬夕映にどこか声が似ている気がする。こちらにも性格は全然違うのに、だ。

……まあ、ただの偶然だよな。

「ええ、それでなのはさんを彼にも紹介しておこうと思ってね。こうして探しているのよ」

と、そんな事を考えている間にも二人の会話は進んでいたらしい。

「ああ、それで……。でも少しタイミングが遅かったですね。なのはちゃん、クロノ君とフェイトちゃんと面接に行っちゃいましたよ」

困った様子の顔をエイミィは浮かべている。

「あら、ならすれ違いになっちゃったわね」

残念、と言わんばかりに人差し指を唇に当てた。

「まだしばらくかかるだろうし……どうしましょうか」

「なら、また僕と読書でもしない？」

ずい、と会話にユーノが割り込んだ。

彼とはすでに面識があり、彼との間には、性格や趣味も似ているせいか即座に馴染めた事は記憶に新しい。

「あれ、ユーノ君ともう知り合ってたの？」

「ああ、それはですね……」

エイミイの質問にネギは、ユーノとの出会いを簡潔な説明をした。図書室で偶然であり、趣味の一致などが意気投合したことなども。

「おつどろいたあ、まさかユーノと同じ趣味を持つ人がいるなんて」

二人の会話を聞いていたアルフが心の底から意外だ、と言わんばかりの声をあげた。

「な……失礼な」

無然とするユーノにアルフは腕を組んだまま続けた。

「だってさあ、どーしてもアタシには理解できないなあ。ただの古臭い道具にどうしてそこまで好きになれるんだい？」

「ちょ！？」

アルフの呆れたような言葉に、ユーノは思わず目を剥いた。

どこの世界や時代であっても、趣味を貶めるという行為は許し難いことらしい。即座に反論をはじめた。

「アルフ、何を言ってるんだ！ 遺跡や、アンティーク古道具にある価値を！ 年季が入っていれば入っているほど素晴らしく感じるこの感触を！」

「あーはいはい、分かったよ。でもさあ、アタシにとってはすぐに食べれる肉とかの方がはるかにいいーんだけどなあ」

だが、残念な事にこの手の反論は大抵の場合は無意味に終わる。

価値観の違い。

このたった一言の言葉の前に、趣味の理解などほとんどされる事がない。

「アルフ……君は分かってない！　そもそも……」

だんだんとヒートアップしていくユーノに、ネギは苦笑を浮かべて眺めるしかなかった。

「ああ、そうそうネギ君」

「はい？」

「なのはさんが来るまでまだ時間がありそうだし、貴方のこれからの事を話してもいいかしら」

少し3人から離れた場所に案内され、そこにある椅子に腰を下ろした。

人が通りかかる様子はない。静かな空間だ。それだけに、リンディの声がよく聞こえた。

「私達は、これから闇の書とその守護騎士についての捜査を行う事になるんだけど……」

ネギも、さきほど簡単に説明を受けたロストログア・闇の書。過去に、幾多もの命を奪ってきた呪われた魔導の本。そして、その闇の書とその守護騎士達。

最近起きているらしい連続魔導師襲撃事件も彼女達の仕業である可能性が濃厚、とのことだ。

「貴方達が襲われた時といい、どうも彼女たちの活動拠点は第97管理外世界　地球の可能性が高いみたいなのよ」

「地球が……」

ネギの顔が思わず曇る。

自分の知っている地球とは別の存在だとしても、やはりよく見知った場所のよく似た場所が事件の現場になってしまっているという事はいい気がしない。

「そこで私たちは事件の中心地点になっている地球の方に闇の書の探索、およびに連続魔導師襲撃事件の捜査本部を置こうと思うんだけど……貴方もそこに住む気はない？」

有耶無耶になってしまった気はするが、そもそも今回地球へと向かった目的は元の世界に返す手掛かりを探すため。

そして手掛かりがほとんど見つからない現状、管理局の保護を受ける必要が間違いなくある。それも、場合によってはかなりの長期間をだ。となれば、見慣れぬ世界で過ごす事になることよりは、見知った世界にかぎりなく近い世界　第97管理外世界で過ごした方がいい。

それに、地球にいれば何らかの手掛かりが見つかる可能性も皆無ではないはずだ。少なくともこのまま本局にいるよりかはいいはずだ。

管理局から離れるなどという行為は論外だ。知り合いが一人もない文字通りの異世界。そんな事をして、どうしようもないだろう。

となれば、断る理由はどこにもない。

「……分かりました。お世話になります」

「ありがとう、ユーノ君達もきつと喜ぶわ」

そう言ってリンディはにっこりと微笑んだ。

クロノの目の前にいる穏やかな男性は、ギル・グレアム。クロノの指導教官でもあり、クロノの師匠だった使い魔の主でもある。

それに向かう合うように座っているのは、高町なのはとフェイト・テストロッサだ。今回の面接は、グレアム提督がフェイトの保護責任者になった事に関しての事だ。

とはいえ、グレアムとリンディやクロノは旧知の中であるし、大まかな人柄に関してはすでに話してある。

ゆえに、それほど大きな問題はないと思うがそれでも念のためにとこの場にいる。

幸いな事に、ヴォルケンリッターと名乗った騎士達とのダメージは大したことがなかった。

だからこそ、当初の予定通りにグレアム提督と二人の面接に付き添えていた。

予想通り、というべきかトラブルらしいものは何も起こらずに順調に進んでいる。

が、ここでふと資料を見ていたグレアムの目が止まった。

「ん？　なのは君は日本人なのか。……なつかしいなあ、日本の風景は」

どこか昔を懐かしむ様子でグレアムは続ける。

「私も君と同じ世界の出身なんだ。イギリス人だ」

「ふえ？　そうなんですか！？」

驚きの声を出すなのはを横目に、ふとクロノの頭にあの赤毛の少年の姿が思い出された。

（イギリス……か）

グレアムが、なのはに魔法との出会いについて説明している様子を横目で見つつも、彼の故郷もイギリスだったと言っていた事を思い出す。

グレアム提督には、まだあの少年の事は話していない。

だが、いずれは話して協力を要請する必要があるかもしれない。

……まあ、今回はフェイトの件で来たわけだし今度にするか。

グレアム提督も立場上忙しいはずだし絶対にこの場でする必要もないわけだし次の機会にするか、とクロノは考えた。

「フェイト君、君はなのは君の友達なのかね？」

……と、思考に没頭している間に別の話題に変わっていたらしい。

「はい」

ためらいもなくフェイトが提督の言葉を首肯する。

「ではひとつ約束してほしい。友達や、自分を信頼してくれる人を決して裏切ってはいけない。それさえ守ってくれるのならば、君の行動について何も制限しない事を約束するよ。……できるかね？」

その言葉に、フェイトがグレアムを見据えて返す。

「はい、必ず」

いい返事だ、とグレアムが返す。

その後は、いくらかの注意事項と確認だけで話は終わった。

なのはとフェイトは、クロノより先に部屋から退室する。

その後に続くようにクロノも退室しようとして……足を止めた。

「提督。もうお聞き及びかもしれませんが、自分たちがロストロギア・闇の書の搜索担当に決定されました」

「そうか、君がか」

ロストロギア・闇の書はかつて、クロノの父でありリンディの夫であるクライド・ハラウンを屠った悪夢とも言える魔導書。

その事件の担当にクロノやリンディ達を選ばれる それに対し  
てグレアムも色々と思うところがあるのだろう。

複雑そうな表情で言葉を続けた。

「言えた義理ではないかもしれないが、無理はするなよ」

「大丈夫です。窮地にこそ、冷静さが最大の友。提督の教え通りです」

「うむ、そうだったな」

グレアムも納得したように頷いた。

「では……」

用件は終わった。

そう思っ て立ち去ろうとした刹那、

「ああ、ちょっと待ってくれ」

不意に呼び止められた。

なんでしょう か、と立ち止まったがグレアムはなかなか次の言葉を出そうとはしない。

数秒ほどたってから、ようやく口を開いた。

「いや……、すまない。何でもない」

「？　そうですか。それでは今度こそ」

グレアムの態度を怪訝に思ったものの、特に追求することなく再び頭を軽く下げてから退室した。

時空管理局本局の長くて広い廊下。

そこを、金髪と茶髪の二人の少女が歩いている。

「いい人が保護責任者になってくれて良かったね」

片方の少女・なのはが笑顔を浮かべながら話す。

それに対し、もう片方の少女・フェイトも同様だ。

「うん、ありがとうなのは」

につこりとフェイトも笑顔を浮かべて少女の名前を呼んだ。

「それにしても、本当に久しぶりだね。フェイトちゃん」

フェイトの横を歩く少女　高町なのはは、半年前までフェイト  
にとって敵だった少女。<sup>ライバル</sup>

そして、今は大切な友達だ。無論、それはなのはの方からしても  
同じことだが。

「うん。ジュエ　あの事件の最後に合わせてもらってからもう何  
ヶ月も経つもんね」

ジュエルシード事件、と言いかけてなのはは慌てて言い直したよ  
うだった。あの事件が、フェイトにとって与えた影響は大きい。嫌  
な思い出まで同時に引っ張り出されてしまわないかと、この心優し  
い少女は危惧してしまったのだろう。

だが、フェイトは気にしてないよ、と言わんばかりに笑みを浮か

べて見せた。

「うん。それにしても本当に……本当に久しぶりだね」

しばし、二人は無言になる。

別れたのはわずか数か月前。されど数か月前だ。

ビデオメールのような形で会話こそあったものの、この数ヶ月は長かった。いや長かったように感じた。

少なくともなのはとフェイトにとっては。

そう思うと、これまで抑えていたものが一気に溢れ出るようだった。

つつ、とフェイトの頬に一筋の涙が流れそうになる。

「フェイトちゃん!？」

驚きの声をあげるなのはに、フェイトは慌てて手を降る。

「ごめん……忘れてた。嬉しくても涙は出るんだったね」

目を擦ろうと、右手を握って瞳の近くへと持っていく。

だが、それよりも早くになのはの左腕が優しく頬を流れる涙をぬぐった。

「うん。私の方こそ嬉しいよ。フェイトちゃんとまた会えて」

なのはの方も、涙こそ浮かんでいないものの嬉しそうな表情だ。空いている右腕を肩に置き、そのまま優しく抱きとめた。

「ありがとう……なのは」

ゆっくりとフェイトもこの不屈の心を持つ友達に礼を言った。

……だが、この時二人は忘れていた。

ここは個室でもプライベートルームでもない。多くの人が通るれっきとした公道であるという事を。

突然だが百合、という言葉をご存知だろうか。

女性同士の恋愛、あるいはそれに準ずる行為の事を指す。近年の日本では、ガールズラブなどとも呼ばれて同人誌などでも一部の層に人気のジャンルだ。

だが、あくまで”一部の”層の話でありそういった類のものに興味のない人間が多い。

そしてそれは、何も年齢制限がつくようなものばかりではない。ただ女性同士で軽く手をつかんだり抱き合ったりしているような軽いものでも百合と呼ばれてしまうこともある。

例えば 今、ネギの前で抱き合っている茶色の少女と金色の少女の二人など。

「  
」

沈黙。

その光景を見てネギは次の言葉が発せなかった。

イギリス人ではある彼であるが、薔薇やら百合などという言葉を知っていた。というか虚実混ざった情報をおもしろおかしく刷り込まれていた。

具体的に言つと出席番号3番や14番の生徒によって。

「にゃ!？」

「ふえ!？」

こちらに気づいた二人が揃って奇声をあげた。

「え、えつと。ごにゅ、ごゆっくり……」

噛んだ。

舌が少し痛かったがとりあえずそつちは後回しにして、慌ててドアを閉めた。

「ちょ、ちょっと待って！ 何か勘違いしてるよね!」

「だ、大丈夫です。趣味は人それぞれだと思いますから……」

「だから違つてーつつつ!……!」

少女の叫びが部屋にむなしく響いた。

数分後……。

少し遅れてやってきたクロノのおかげでなんとか誤解(?)もつけて、互いに自己紹介をした。

目の前の少女は、高町なのは。

リンディに説明を受けたように、こちらの世界の日本に存在する魔導師らしい。ある事件で魔法と管理局の存在を知り、今は管理局に民間協力者として協力しているといった事を聞いた。

「あの、変な勘違いしちゃってすみません。僕はネギ、ネギ・スプリングフィールドです」

「あ、えつと改めて……なのは、高町なのはだよ、よろしく」

先ほど狼狽えていたのが嘘のような、にっこりとした笑顔でなのはは自己紹介をした。

「えつと……、私も改めてよろしく」

社交的なのはと比べると、やや内気の影響のするフェイトがしやべった。こちらの少女とは以前に出会っているが、彼女自身の口数があまり多くなかったこともあってほとんど会話をしていなかった。

「はい。確かテストロッサさん……でしたよね？」

少女の顔を見て、以前にそう紹介されていた事を思い出して聞いた。

「う、うん」

おそらくは、ファミリーネームだと思われる方の名前で金髪の少女を呼んだ。ほとんど面識がない以上、いきなり名前で呼ぶのは失礼だと考えたというのもあるが、それ以上に「フェイト」という名前では「彼」とかかぶるために呼びづらかったという事情も大きかった。

……テストロッサ？

だが、ここまで言っただけで不意に昨日の会話が脳裏に蘇った。

正直、先ほどのテストロッサやそちらの執務官に続いてわずか一晩でこれほどの猛者に会えるとは思わなかったぞ。

テストロッサという名前。あの時戦った騎士の言っていた名前だと。すると、彼女がああ騎士と戦っていた相手。

目の前の少女がおそらく彼女の言っていた相手、フェイト・テストロッサだろう。

そんな事を考えていると、黙り込んだ様子を怪訝そうに思ったのかフェイトが訝しげな顔になる。

「……あの、どうしたの？」

不安そうな顔でフェイトが聞いた。  
ネギは慌てて首を左右に振る。

「あ、いえ、同じ名前の知り合いがいたもので……」

「そうなんだ」

それを聞き、フェイトは安心したような表情を浮かべた。

「……そろそろいいかな？」

互いの挨拶と紹介が終わるのを見計らい、クロノが口を開いた。

「すでに知っていると思うけど、僕たちはこれから闇の書とその守護騎士に対応する為に、日本に滞在する事になっている」

皆は無言で頷く。

「だけど」

クロノは一旦ここで言葉を切り、フェイトの方へと視線を動かして、続いてネギへと視線を動かしてから少し言いづらそうに、いくらかの間を置いてから続けた。

「その前に、少し二人と一緒に来てほしいところがあるんだ」

「来てほしいところ？」

ネギとフェイトは、互いを怪訝そうに見渡した。これまでほとんど接点のなかった二人だ。

その二人に同時に来てほしい場所というのが思いつかなかった。

「第102無人世界。ネギが見つかった場所　プレシア・テスト  
ロッサの研究所のあった世界だよ」

## 0・2話

新暦65年。

後に、P・T事件と呼ばれる事件の始まりよりも少し時間を遡る。

時の庭園の一室。

「何ていう事をしてくれたのッ！」

プレシア・テストロッサの叱責する声が部屋に響いた。

プレシアの目の前にいるのは、プレシアの娘　厳密に言えば娘の記憶を持つ少女　であるフェイト・テストロッサ。

足元に転がっているのは、『時の忘れ物』と呼ばれる古代遺産。ロストロギア  
プレシアが目の前の少女に命じて確保させたものだ。

その原因は、目の前の少女　フェイトにあるわけではない。  
プレシアの命令を受けたフェイトは、この『時の忘れ物』の保管  
されている施設から入手し持ち帰ろうとした。  
だが、思いもよらぬ出来事が起きた。

その施設に雇われていたらしい魔導師がいたのだ。いや、それくらいならば予想の範疇だったもののその強さは予想外のものだった。  
軽く見積もってもAA。もしかしたら、フェイトと同格のAAA  
クラスだった可能性すらあった。

これくらいのクラスになるともはや立派な人間兵器といっても差し支えない。

できることならば戦闘は避けたかったものの、そうはいかなかった。

結果として、勝利こそ収めたものの、戦闘の余波を受けてしまい肝心の『時の忘れ物』の破損がひどく使い物にならなくなっていた。しかし、相手の力量を考えれば無傷で勝利するのは難しかった以上、仕方のないことだった。

だが、そのように「仕方がなかった」ですませられるような精神的な余裕は今のプレシアにはすでになかった。

そして、それは目の前の少女に責を押し付けることでしか発散する事ができない。

無言のままに鞭を、力のままに振り下ろした。

肉が裂けるかのような音が響き渡り、少女は苦悶の声を出す。だが、プレシアはそれに容赦する事なく一撃、二撃と加えていく。

鞭で叩く。

悲鳴が聞こえた。

鞭で叩く。

肉体を強く叩く音が聞こえた。

鞭で叩く。

服の裂ける音が聞こえた。

目を背けたくなくなるような凄まじい折檻だったが、この場にそれを止める者はいない。

ちなみに、余計な横槍を入れられぬためにフェイトの使い魔であるアルフは離れた場所で待機させている。

時間にして十数分ほどでようやく終わった。

服はすでにボロボロになり、あちこちが裂けて素肌を露出している。それは、見る者が見ればひどく魅力的な光景なのかもしれないが幸か不幸かプレシアにそのような趣味はない。

折檻を終えたプレシアは多少の気が晴れたものの、肉体的には大きく負担がかかったただけだった。ごほごほ、と咳き込む。

母の異常に気づいたのか、項垂れた状態だったフェイトの視線がかすかに上がる。

それを無視したまま大きく呼吸をし、プレシアはふと黙考する。

これは、八つ当たりにはすぎないかもしれない。

しょせん、目の前の少女はアリシアの偽物 使い捨ての道具なのだと思ひ込む事によって自分の価値観を無理矢理壊しているだけなのかもしれない。

……いや、自分は何を考えているのだ。

そこまで考え、慌てて考えを打ち消して強く床を鞭で叩いた。それだけで、フェイトはびくりと肩を震わせた。

プレシアは冷たい瞳で見下ろしたまま、告げるように言った。

「次に貴女にとってきて欲しいのはこれ」

手元に、モニターが浮かぶ。

そこに映し出されているのは青い宝石。

「ロストロギア・ジュエルシード。今は、第97管理外世界にある

極東の島国に散らばっているこれが　どうしても必要なの」

苦悶の色を浮かべつつも、フェイトはかすかに頭を前に動かした。それを了承と受けとったプレシアはこれ以上の会話は不要とばかりに、彼女の魔導端末デバイスに必要な情報を送りこみ、フェイトに背を向ける。

「必要な物があれば用意させるわ。だから、必ず手に入れてきなさい」

そのまま出口へと歩き、外へと通じるドアの前で一度足を止める。

「　今度こそ、母さんを喜ばせてね」

言葉だけならば懇願しているよう聞こえるだろう。

しかし、その言葉を発した声は間違っても懇願しているようには全く聞こえず脅しているようにしか聞こえない、と自分で言うておきながらもプレシアは思った。

自室に戻ると、プレシアは荒々しく扉を叩きつけるようにしめた。  
「ふっ……」

同時に即座に机に向かい、カプセル錠の薬をコップに注いだ水で飲み干した。

それによって少しだけ気分が良くなった気もしたが、所詮は少しだけだ。体中を支配する不愉快な気持ちはほとんど消えていない。その原因は、あの人形フィギュアの成果が期待外れだったということだけではない。プレシアの体に巢食った病魔は体中を蝕んでいるという事だけでもない。

その原因は、プレシアの目の前にあった。

「……勝手に人の部屋に入らないでくれるかしら」

プレシアの私室の椅子に勝手に座っている男。

彼にこそ原因があった。この男は、彼女の大事な協力者だ。もしかしたら、自分の悲願を叶えてくれるかもしれない貴重な手掛かりともいべき男だ。

だが。

人間としては全く好意を持ってない類の男であり、プレシア個人としても間違っても好きにはなれない性格の持ち主だった。

怒鳴り散らすわけにはいかないが、敬意を払ってやる気は毛頭ない。

「まあ、そう邪険に扱わないでくれたまえ。私は君にとっても大事な取引相手のはずだが？」

「……」

プレシアは不快そうな顔をして押し黙る。

極めて不愉快なことではあるが、この目の前の男との関係を破綻させるのはまずい。だが、楽しくおしゃべりを交わすような仲でも

ない。

「出ていってくれないかしら？ 私は一人で休みたいの」

「はいはい、君がそういうのなら出ていくよ。でも良いのかな？ 今回の件も駄目だったのなら、もう後はないのではないのかね？」

他人事のように肩を竦めるように男に腹を立てながら。

いや、実際にこの男にとっては他人事である。だからといって決してこのような態度をとられて気分がいいはずがないが。

「……まだ手はあるわ」

椅子に腰掛けながら、呻くようにプレシアは声をしぼり出した。

そして、先ほどフェイトに見せたのと同じ映像を男に見せつける。

「ロストログア、ジュエルシード」

その言葉を口にした途端、瞳に狂気ともいえる色が浮かぶのが自分にも分かった。鏡はこの部屋にないが、もしあるとしたら自分はどうのような顔をしているのだろうか。

少なくとも、愛娘には　むろん、偽物<sup>フェイト</sup>とは違う本物の娘の方には見せたくないであろう顔なのだろう。

「ほんの数個だけでも次元震が起こせるだけの古代遺産。これが全て、21個集まれば奇跡だって、アルハザードへの道だって開けるかもしれない」

あちこちに張り巡らせた情報網に引っかけた情報だ。そこに、一途の望みを繋いでいた。

自分の体の事を考えればおそらくこれは最後のチャンスになる可能性が高い。すでに体はボロボロだ。プレシアに医療知識はそれほどあるわけではないが、それでも自分の体の事だ。自分の寿命は自分が一番よく知っている。おそらくもう長くはないだろう。決して遠くない未来。自分はアリシアのいるあの世へと旅立つことになるだろう。だが、その前に。その前にアリシアを自分のかわりにこの世に<sup>ち</sup>戻してやらねばならない。

それは、親としての義務感か、それとも娘を守れなかった事に対する責任感か。もしくは贖罪か。あるいは愛か。もはやアリシアを蘇らせようと考えたそもその動機が自分でも分からなくなっていた。

ただひとつだけ言える事は、このまま何も成せぬまま死ぬわけにはいかないという事だけだ。

「ほづ……」

男は、感心したかのように声をあげる。

だが、すぐにそれは皮肉げなものへと変わった。

「しかし、それも失敗してしまったらどうするつもりかな？」

「いきなり失敗する前提での話？ 本当に無礼な人ね、あなたは」

「もしもの話をしているだけだよ」

男は平然と返す。

そして、仮面越しの顔がかすかに揺れた。

……もしかして笑ったのだろうか。

そうだとしたら不愉快な話だ。

「忘れないで欲しいのだが、こちらにはしっかりと用意がしてある。君の願いを叶える用意がね」

「……」

黙っているプレシアを無視して男は平然としたまま話を続け、ニヤリと笑みを浮かべた……ような気がした。

「さて、その気があるのなら君にとってのヴァルハラへのチケットを与えよう。いつでも歓迎するよ。プレシア・テストロッサ」

「……」

プレシアは再び沈黙で答える。

この男から、プレシアはある計画を提案された。だが、その計画というのはとてもではないが即答できかねる内容だった。

故に、その回答は保留となり未だにフェイトに指示を出し、様々なロストログアを回収させている状態だった。

その中にプレシアの悲願が叶えられるものが入っているのならばそれに越したことはない。このような胡散臭い男の計画に加担する必要はなくなる。

だが、全てが手詰まりとなり進退窮まったらその時は……。

「まあ、すぐに返事をしろとはいわないよ。でも私は君の完成させたプロジェクトについて強い興味を抱いている」

その言葉に、かすかにプレシアの眉が釣りあがる。  
プロジェクトFは完全に失敗だった。少なくともプレシアにとっては。

そんな事を褒められてもプレシアはまるで嬉しく思えない。  
むしろ侮辱だった。

「……帰ってちょうだい」

怒りを押し殺し、男から顔を背ける。

「はいはい、分かったよ」

すう、と背後から気配が消えるのがわかる。  
そこでプレシアはようやくふう、と安堵の息をついた。

「全く。忌々しい……」

椅子に座り直したプレシアは、ふと先ほど受け取ったロストロギア、『時の忘れ物』の方へと目を向ける。

少しぐらい、労わっておけば良かったかしら。

冷静さを取り戻して考えれば、先ほどのフェイトへの態度はやりすぎだったかもしれない。

曲がりなりにも、この『時の忘れ物』を持ってきたのだ。叱責するにしても、少しは褒めても良かったかもしれない。

「でも、これじゃあもう使い物にならないわね」

眩くように、『時の忘れ物』を見る。

この『時の忘れ物』は、どんな魔法や技術を使っても実現不可能と呼ばれるある機能のついたロストログアだった。

だからこそ、プレシアは欲した。

これさえ使えば、プレシアの目標は達成できる。

だが、目の前にある『時の忘れ物』はすでに使い物にならなくなってしまうっている。

「でも、捨ててしまうにはあまりにも惜しいわね……」

これほどのロストログアだ。

使えないにしても、このまま放置するのはあまりにももったいない気がした。

壊れたとはいえ、時間をかけて研究さえすれば修理も可能かもしれない。だが、その時間がプレシアにはほとんどなかった。

いつ終わるか分からない研究よりも、どんな願いでも叶えると呼ばれる21個のロストログア・ジュエルシード。こちらに望みを託した方がいい。

そう考えたプレシアは、今はもう使っていない第102無人世界にある研究施設へと『時の忘れ物』を転送した。

「ふう……」

『時の忘れ物』が無事に転送されたのを確認し、プレシアは大き

く息をついた。

そして、この事についてはいったん思考の片隅へと追いやり、  
ユエルシードの事について頭を回転させはじめた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3918u/>

---

Magic to cross 異なる世界と異なる魔法

2011年12月31日19時52分発行